三重県阿山郡大山田村

# 向山2・6号墳発掘調査報告

1987・3

三重県教育委員会

# 序

住宅団地造成など民間企業による開発事業、広大な事業面積の圃場整備事業、道路改良及び河川改修など公共事業に伴う埋蔵文化財保護の問題は年々増加の傾向にあります。

三重県教育委員会では、各開発関係部局の事業を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてまいりました。今後ともなお一層、関係者への埋蔵文化財の理解と認識を深めていきたいと考えておりますので広く県民の皆様方の理解と協力をお願いする次第であります。

ここに報告する向山古墳群（２号墳・６号墳）の発掘調査は、県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（大山田南部二期）の施工に先立ち、古墳の概要を記録にとどめるため実施されたものです。これらの祖先の残した歴史遺産は、貴重な財産として保護され、後世に伝えていくとともに、今後の文化の向上発展の基礎として活用していかなければなりません。

発掘調査の結果、向山２号墳は伊賀地方でも最大級の横穴式石室のひとつであることが確認され、また、新たに確認された６号墳からは、数多くの副葬品が出土いたしました。これらは、地域の歴史を考える上できわめて貴重な資料であります。また、２号墳については、現地保存の声が高まり、関係者が協議しました結果、移築して保存することになりました。移築保存、調査にあたっては、県農林水産部・上野耕地事務所・大山田村教育委員会をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜りましたことをここに深く感謝の意を表します。

昭和62年３月

三重県教育委員会

教育長　中　林　　博

# 例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が、三重県農林水産部から執行委任を受けて実施した県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業(大山田南部二期)に伴う阿山郡大山田村大字平田字向山地内に所在する向山古墳群２号墳・６号墳の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は下記の体制で行なった。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会事務局文化課

主事　仁保晋作

主事　上村安生

田中久生

調査協力　大山田村教育委員会

大山田村地元各位

3．発掘調査後の整理及び報告書作成は三重県教育委員会文化課倉田直純・上村が中心となって行なった。文責についてはⅢ－３、Ⅳ－３を倉田、他は上村が担当し、遺物写真は駒田利治が撮影した。

4．本遺跡の遺跡略記号は４ＰＭＵＹである。方位はすべて真北を用いた。なお、当地域の磁針方位は西偏約６度20分（昭和55年）である。墳丘・石室主軸は、真方位に沿うものではないが、近い方位をとって、「東平担部」「石室西壁」というような表現を用いた。

**5. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。**

# 目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……3

Ⅲ　向山２号墳の調査……6

　１．墳 丘 の 調 査……6

　２．主体部の調査……9

　３．遺　　物……14

Ⅳ　向山６号墳の調査……18

　１．墳丘の調査……18

　２．主体部の調査……18

　３．遺　　物……20

Ⅴ　結　　語……24

# 図版目次


ＰＬ１　２号墳調査前墳丘
　　２号墳調査前墳丘
ＰＬ２　２号墳玄室内埋土状況
　　２号墳玄室内埋土状況
ＰＬ３　２号墳玄室・羨道埋土除去後
　　２号墳墳丘盛土除去後
ＰＬ４　２号墳墳丘たちわり調査
　　２号墳墳丘たちわり調査
ＰＬ５　２号墳銀環45・46、鉄鏃47、須恵器30・31、
　　銀環40・44、須恵器３出土状況
ＰＬ６　２号墳玄室内より羨道
　　２号墳玄室
ＰＬ７　２号墳袖部・奥壁
　　２号墳奥壁と東側壁・奥壁と西側壁
ＰＬ８　２号墳奥壁上部東隅
　　２号墳奥壁上部西隅
ＰＬ９　６号墳調査後
　　６号墳遺物出土状況
ＰＬ10　６号墳調査風景
　　調査区全景
ＰＬ11　２号墳解体移築調査風景
ＰＬ12　２号墳出土遺物
ＰＬ13　墳丘盛土・墳裾出土遺物
ＰＬ14　６号墳出土遺物
ＰＬ15　６号墳出土遺物
ＰＬ16　６号墳出土遺物
ＰＬ17　６号墳出土遺物
ＰＬ18　６号墳出土遺物
ＰＬ19　２号墳出土遺物
　　６号墳出土遺物


# 挿図目次


第１図　地区設定概略図……１
第２図　遺跡位置図……３
第３図　発掘区平面図……４
第４図　遺跡地形図……５
第５図　調査前墳丘測量図……７～８
第６図　調査後発掘区断面図……７～８
第７図　調査後発掘区平面図……７～８
第８図　２号墳石室実測図……10
第９図　２号墳遺物出土状況図……11～12
第10図　２号墳墳丘断面図……11～12
第11図　２号墳出土遺物……15
第12図　中世の土器……16
第13図　墳丘盛土出土の土器……17
第14図　６号墳遺物出土状況……19
第15図　６号墳石室実測図……19
第16図　６号墳出土遺物……21
第17図　６号墳出土遺物……22
第18図　６号墳出土遺物……24


# 表目次


第１表　２号墳出土土器観察表
第２表　２・６号墳出土土器観察表
第３表　６号墳出土土器観察表
第４表　６号墳出土土器・中世の土器観察表

# Ⅰ．前　　言

## 1．調査に至る経過

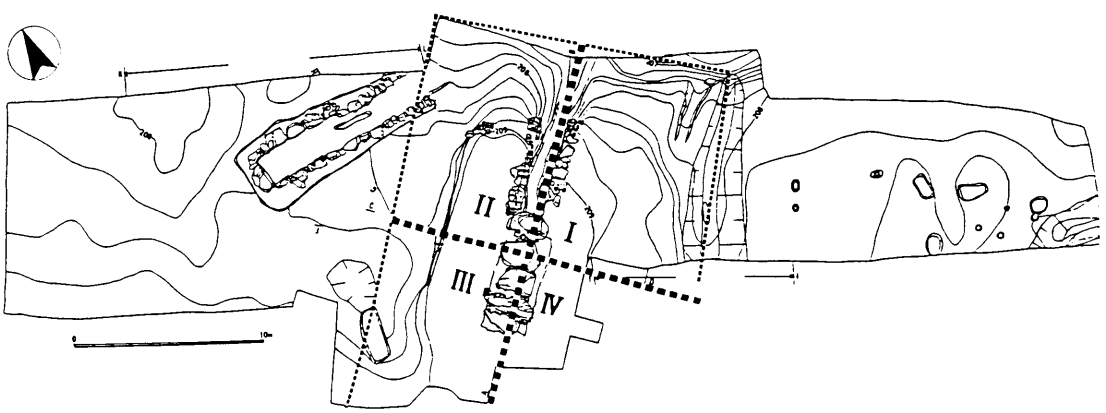
三重県教育委員会文化課では、国および県にかかる各種公共事業に関して、各開発関係部局の事業を照会し、事業予定地域内の文化財の確認とその保護に努めてきている。しかし、これらの開発行為に伴ない、地上から姿を消していく遺跡も数多い。

三重県農林水産部より、県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（大山田南部二期）の事業計画の連絡を受けた文化課では、昭和56年に事業予定地内の遺跡分布調査を実施したところ、事業予定地内には数多くの遺跡が存在することが確認され、その保存に努めるように農林水産部・上野耕地事務所と再三再度協議を重ねてきた。しかし、この道路が大山田村内を東西に結ぶ地域住民の生活道路として必要であること、遺跡密度の高いところを通るため、路線変更を行っても他の遺跡が事業予定地内に含まれることにより、路線変更は困難であるとの結論に至った。しかし、今回調査を実施した向山２号墳は、調査前より石室は既に開口しているものの天井石がよく残っており石室の遺存状況がよいことからその保存に努めたが、やむなく調査を実施することになった。なお、この事業に伴ない、三谷遺跡・歌野遺跡・永井氏城・前山一号墳・小上野墓谷遺跡・下中島古墳群が発掘調査され、姿を消していったが、向山２号墳については、調査が進展するにつれ、伊賀地域でも最大級の石室をもつ古墳であることが確認され、再度、路線変更による現地保存について、県農林水産部・大山田村・県文化課の各関係者の間で協議がもたれた結果、移築保存されることとなった。また、調査途中、新たに６号墳が発見され、合わせて調査することになり、昭和60年度・昭和61年度の２カ年にわたって調査を行うこととなった。

調査は、県農林水産部より、執行委任を受け、昭和61年２月25日より同年６月６日まで実施した。さらに、昭和61年10月に２号墳墳丘のたちわり調査を行ない、保存方法に一応の協議が整った昭和62年２月に石室の移築工事を行ない調査を終了した。なお、２号墳の石材は、現在、大山田村真泥地内に仮り置きされ、復元される日を待っている。

## 2．調査の方法と経過

調査は、２号墳石室の主軸に合わせて、墳丘を４分割して、地区設定を実施し（Ⅰ区北東・Ⅱ区北西・Ⅲ区南西・Ⅳ区南東）、表土（本来は盛土の一部である）除去を行なったが、最終的には、天井石が全部確認できる任意の面で止めた。また、東側平坦部には、中世の遺構の存在が考えられたので、トレンチを設定したのち、事業予定地内を面的に調査した。２号墳の調査途中、Ⅱ区北西裾部において新たに古墳１基が確認され、向山６号墳として調査を実施した。




**第１図　地区設定概略図（1：400）**

# 調査日誌（抄）

| 月　日 | 内　容 |
|---|---|
| 2・25 | 倒木の除去。資材搬入。2号墳墳丘測量。 |
| 2・26 | 古墳の東平坦面トレンチ調査開始（2m×21m）。2号墳墳丘調査前写真撮影。トレンチより青磁・信楽焼等出土。中世城館の可能性も考慮。2号墳墳丘地区設定――4分割（北東Ⅰ区・北西Ⅱ区・南西Ⅲ区・南東Ⅳ区） |
| 2・27 | トレンチ継続。墳丘表土除去開始――すぐに天井石一部露出。東平坦面は面的に拡げて調査をすることに決定。 |
| 2・28 | 墳丘Ⅰ・Ⅳ区表土除去。表土より五輪石出土。他にも中世の遺物多し。 |
| 3・1～2 | 羨道部表土除去。Ⅰ・Ⅳ区表土除去。 |
| 3・5 | 同上。墳丘南北セクション実測。 |
| 3・6 | 羨道部埋土除去。Ⅰ・Ⅱ区表土除去。Ⅱ区に周溝確認トレンチ設定。 |
| 3・7～8 | 同上。羨道部瓦器出土――二次的な再利用が行われているようである。玄室内の崩れた石撤去。 |
| 3・12 | 同上。Ⅰ区裾にて周溝らしき黒褐色土検出。須恵器多し。 |
| 3・13 | 羨道部セクション用壁とりはずし。Ⅰ・Ⅱ区表土除去。 |
| 3・15 | Ⅰ・Ⅱ区墳丘裾表土除去。羨道が八の字型にひらいていく。石室実測用基準設定。 |
| 3・17 | 玄室内埋土除去。東側平坦面重機にて表土除去。 |
| 3・18 | 同上。玄室奥壁付近銀環出土。 |
| 3・19 | 雨のため重機だけ作業。 |
| 3・20 | 東側平坦面表土除去終了。 |
| 3・24 | 玄室及び羨道部の崩落している巨石除去。 |
| 3・25 | 羨道部にて排水溝確認。 |
| 3・26 | 玄室床面の再調査。銀環3個出土。墳丘西側にさらにもう一基石室の一段だけを残す古墳確認。向山6号墳とする。 |
| 3・27 | 2号墳石室割りつけ開始。墳丘東側周溝は丸くなってこない。 |
| 3・29 | 2号墳玄室プラン実測。60年度の調査終了。 |
| 4・7 | 2号墳玄室内割りつけ。61年度作業開始。 |
| 4・8～9 | 2号墳玄室実測開始。6号墳の拡がる西平坦面立木の伐採。 |
| 4・10 | 2号墳羨道部割りつけ。 |
| 4・11 | 西側平坦面重機にて表土除去。 |
| 4・12 | 2号墳玄室・羨道実測。2号墳墳丘Ⅰ区周溝表土・埋土除去。 |
| 4・14 | 2号墳玄室・羨道実測。Ⅰ区周溝は丸くならない。2号墳は方墳か。 |
| 4・15 | 発掘区全体略測。午後調査ニュース作成。 |
| 4・16 | Ⅰ区周溝終了。 |
| 4・17～18 | 2号墳羨道部実測。東側平坦面遺構検出。 |
| 4・21 | 東側平坦面終了。2号墳横断面見通し実測。 |
| 4・24 | 2号墳横断面見通し実測。6号墳調査開始。 |
| 4・25～26 | 6号墳玄室埋土掘り下げ、奥壁部に遺物集中。2号墳の遺物より古そうである。 |
| 5・1 | 2号墳墳丘Ⅲ区表土除去。6号墳玄室清掃。 |
| 5・7 | 2号墳墳丘天井石上の表土除去。 |
| 5・8 | 6号墳写真撮影。 |
| 5．9 | 6号墳石室プラン実測。2号墳Ⅱ・Ⅲ区裾掘り下げ。 |
| 5・10 | 6号墳遺物とりあげ。 |
| 5・12 | 6号墳遺物とりあげ終了。 |
| 5・13 | 6号墳実測基準設定。6号墳掘り方検出。 |
| 5・15 | 6号墳石室掘り方掘りさげ。 |
| 5・16 | 6号墳平面図実測。立面割りつけ。 |
| 5・17 | 2号墳東平坦面平板測量。6号墳立面実測。 |
| 5・19 | 6号墳西平坦面遺構検出。 |
| 5・21～23 | 2号墳墳丘天井石上の表土除去。 |
| 5・24 | 同上。セクション実測後完全に表土除去。 |
| 5・26 | 2号墳天井石割りつけ。 |
| 5・27 | 同上。6号墳横断面見とおし。 |
| 5・28～6・6 | 2号墳天井石実測。 |
| 6・7 | 現地説明会準備。 |
| 6・8 | 現地説明会　　参加者70名<br>大山田村農村構造改善センターに於て向山古墳群等調査報告会。 |
| 10・13～23 | 2号墳墳丘断面たちわり調査。 |
| 2・7～11 | 2号墳石室移築作業。 |

# Ⅱ．位置と歴史的環境

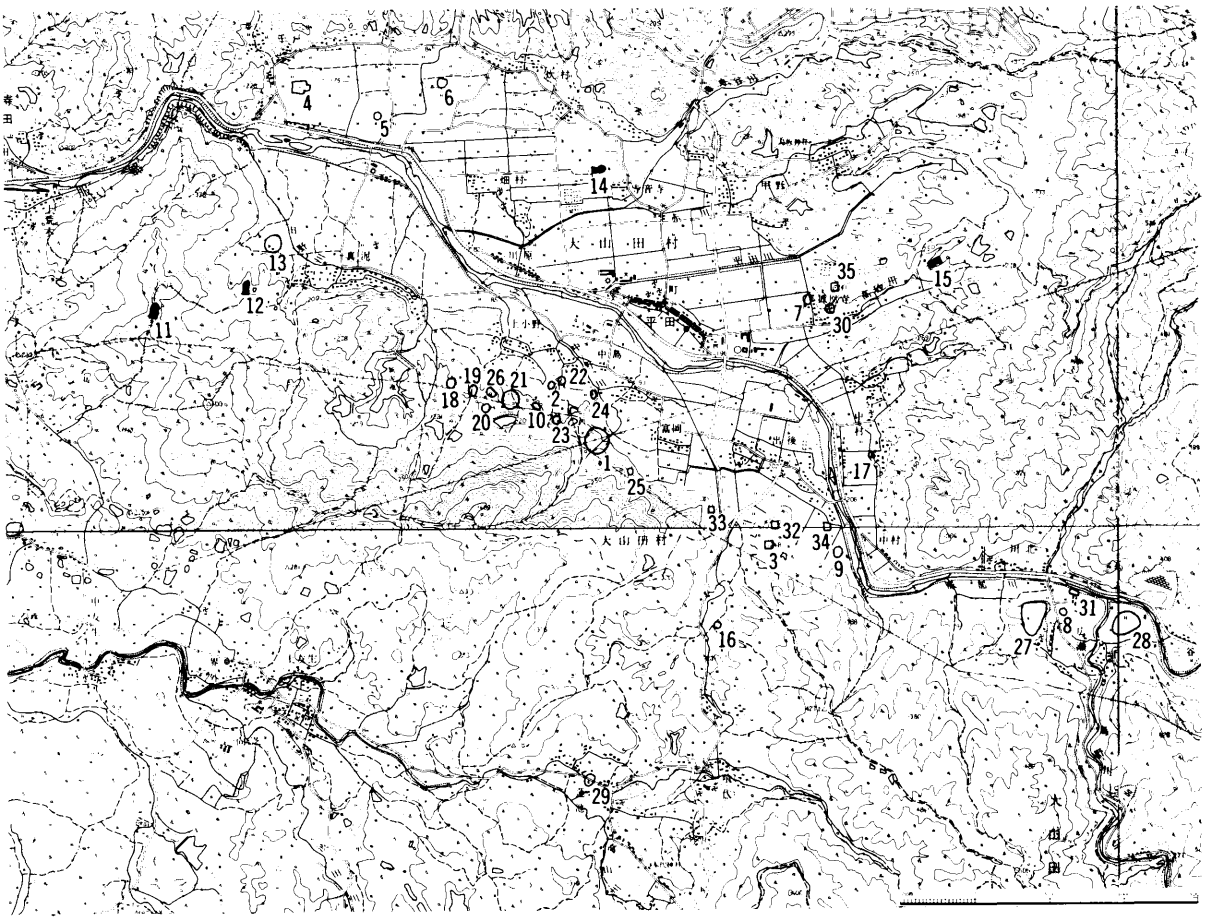
上野盆地の東端部に位置する大山田村は、上野市と津市を結ぶ県道津－上野線、いわゆる長野峠越えの旧伊賀街道が村内を東西に貫いている。この街道に沿って、布引山地を源流とする服部川が西流している。名阪国道の中瀬インターから、長野峠方面へ向かうと服部川の中流域にさしかかり、山田盆地がひらけてくる。この盆地の南縁には、真泥・中島・富岡・出後などの集落があり、盆地の中央に平田がある。平田は街道四宿の一つであり、同時に盆地の中心集落でもある。これらの集落を望む、服部川左岸の標高210m前後の丘陵には、向山古墳群（1）をはじめとする多くの古墳が築かれている。向山古墳群は行政的には、阿山郡大山田村字向山に所在する。

大山田村域の古代の始まりは、先土器時代末から縄文時代早期である。この頃に使用されたサヌカイト製の有舌尖頭器が、戸川山遺跡、岡山遺跡から見つかっている①。

続いて縄文時代の遺跡では、前期末から中期初頭の土器片と、中期初頭の集石土坑が確認された西谷遺跡（2）がある②。また、永井氏城跡（3）では、前期の石器等が採取されている③。

弥生時代に入ると、里の垣内遺跡（4）、東垣内遺跡（5）、植田遺跡（6）、轟遺跡（7）、沢遺跡（8）、高北遺跡（9）、小上野遺跡（10）等が盆地内に散在し、遺跡の数も増加する。

古墳時代になると、大山田村と上野市の境界荒木




**第2図　遺跡位置図（1：50000）**（国土地理院　上野・平松・伊勢路・佐田　1：25000）

1．向山古墳　2．西谷遺跡　3．永井氏城跡　4．里の垣内遺跡　5．東垣内遺跡　6．植田遺跡　7．轟遺跡　8．沢遺跡　9．高北遺跡　10．小上野遺跡　11．車塚古墳　12．寺垣内古墳　13．山出遺跡　14．寺音寺古墳　15．鳴塚古墳　16．高猿古墳　17．辻堂古墳　18．平林古墳群　19．阿部山古墳群　20．墓の谷古墳群　21．神林古墳群　22．西谷古墳群　23．下中島古墳群　24．野台古墳群　25．前山1号墳　26．小上野墓谷遺跡　27．西沖遺跡　28．歌野遺跡　29．蓮池台遺跡　30．鳳凰寺廃寺　31．田中遺跡　32．中出山城跡

山の鞍部に車塚古墳（11）が、そして、その東北東800mに寺垣内古墳（12）など前期の様相をもつ前方後円墳が築造されはじめる。

また、寺垣内古墳の北には山出遺跡（13）があり、竪穴住居から古式土師器が一括出土しており、前期の集落の存在が考えられる④。

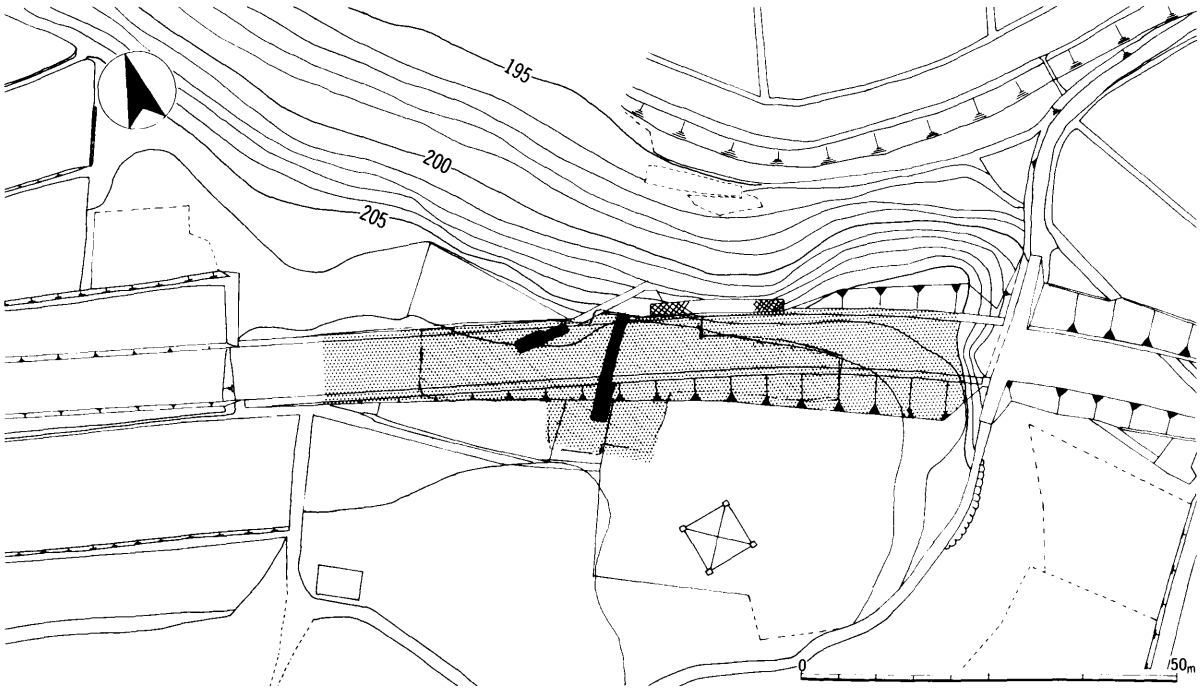
中期になると、車塚古墳の東北東一直線上3.1kmの水田中に寺音寺古墳（14）が築造される。現在は、後円部のほぼ中心部と推定される部分の墳丘がわずかな残丘となって残っているにすぎないが、全長約50mの前方後円墳と考えられる。挂甲小札などが出土している⑤。

後期になると、山田盆地の東側から服部川左岸にかけて２基から10基前後の群集墳が240数基点在している。その中でも、鳳凰寺に所在する鳴塚古墳（15）は、全長37mの前方後円墳で、乳文鏡、子持台付壺などがかつて出土している⑥。

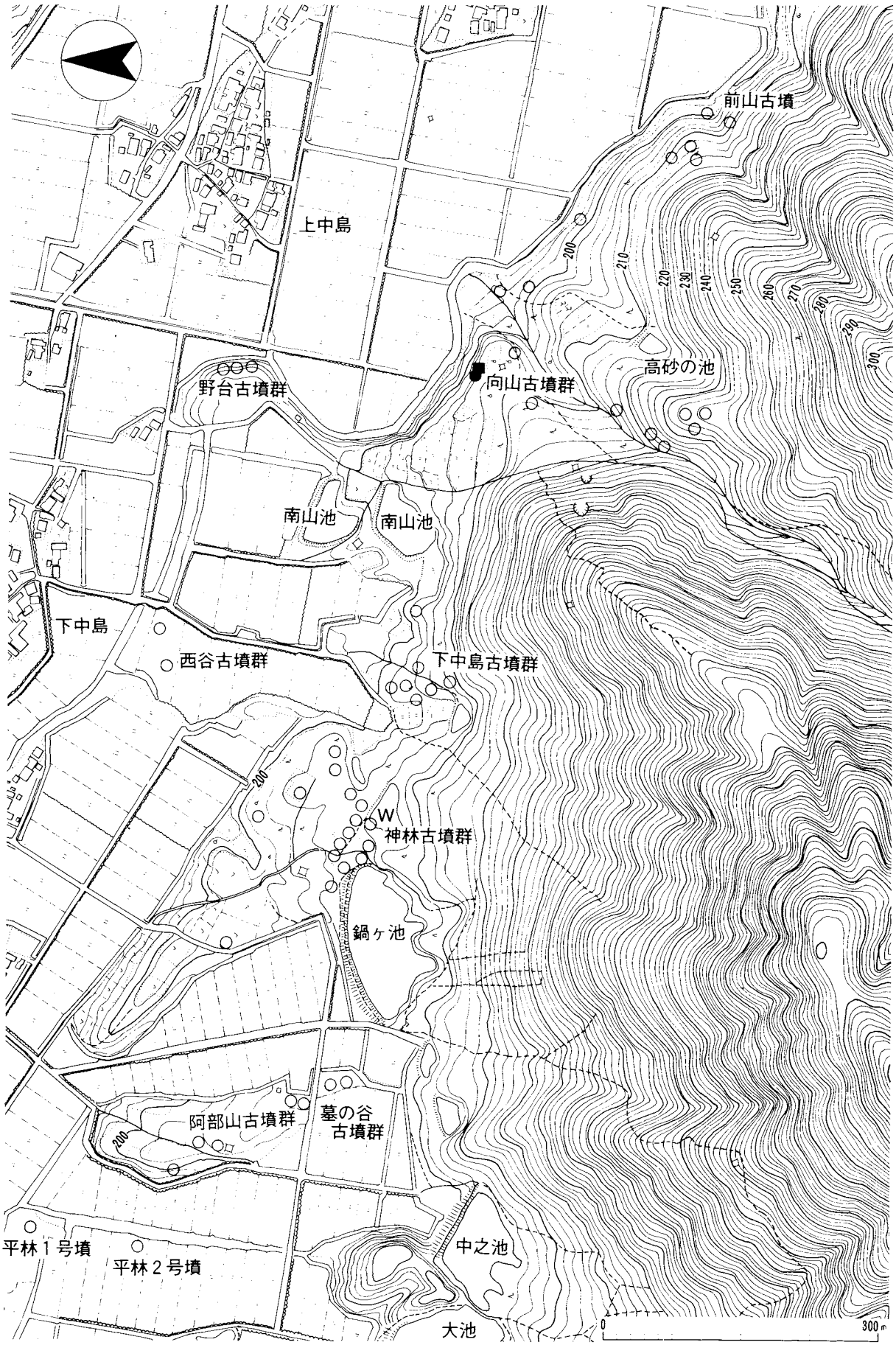
中野川東岸の尾根上には高猿古墳群（16）があり、１号墳からは、蛤・鮑の貝殻や鰈の骨の入った須恵器が出土している⑦。また、中村集落の東には両袖式の横穴式石室や組合せ式石棺・暗渠排水溝をもつ辻堂古墳（17）がある⑧。

盆地周辺山麓の群集墳は、径10m～20mほどの円墳で横穴式石室をもつものが多く、鳳凰寺・中村・出後・小上野・中島・中之瀬・広瀬・川北といった大きく７つの古墳群にまとめることができる。

向山古墳群は、小上野・中島古墳群の１群であり、標高210m前後の丘陵端には、平林古墳群（18）、阿部山古墳群（19）、墓の谷古墳群（20）、神林古墳群（21）、西谷古墳群（22）、下中島古墳群（23）、野台古墳群（24）が続いている。これらの中には、半壊ないし痕跡を残すだけの状況であるものが多く、既に消滅したものもある。発掘調査により、確認されているものをあげていくと、平林２号墳は、推定径18m、高さ２m以上の円墳で、両袖式の横穴式石室を内部主体とし、羨道部に素掘りの排水溝をもつ。出土遺物より６世紀後半に築造され、７世紀中葉ごろまで、第２次、第３次の埋葬が行なわれたものと推定される⑨。また、平林２号墳や、神林７、８、９号墳では、石室内から12世紀から13世紀頃の瓦器椀や土師器の皿が出土しており、第一次埋葬の床面より10cmから15cm上面に炭化物や灰の層が検出されているものもあり、古墳の石室が再利用されたことを示している⑩。西谷１・２号墳は、横穴式石室を内部主体とするものではなく、１号墳は木棺直葬と考えられている⑪。前山１号墳（25）からは、銀象嵌による亀甲文が施文された鉄刀柄が出土している⑫。小上野墓谷遺跡（26）の調査で検出された古墳では、




**第３図　発掘区平面図（1：1000）**




第４図　遺跡地形図（1：6000）

床面より50cm程上に人骨細片を含む焼土面が確認されており、出土した遺物より奈良時代後半頃の古墳の再利用が考えられている[13]。下中古墳群では、竪穴系横口石室の系譜を引く2号墳より、動物をかたどってある装飾器台、子持壺、有孔円盤が出土している[14]。

古墳時代後期の集落跡としては竪穴住居が33棟検出された西沖遺跡（27）がある[15]。

歌野遺跡（28）からは、飛鳥時代の竪穴住居が確認されている[16]。

奈良から平安時代の集落では、西沖遺跡では鉄製紡錘車が出土し、蓮池代遺跡（29）[17]、山出遺跡では緑釉陶器が出土している。また、鳳凰寺廃寺（30）は伊賀妥女宅子との関連が想定され、白鳳期の古瓦を出土しており、この地域の古代史を考える貴重な資料となっている[18]。

中世では、田中遺跡（31）で掘立柱建物や石組の中世墓が確認され[19]、山出遺跡では室町時代と推定される火葬穴と埋葬遺構が確認されている[20]。小上野墓谷遺跡においても、室町時代後半の火葬穴が確認されている[21]。

伊賀には、500余という多数の中世城館が築かれており、山田盆地だけでも、永井氏城、中出山城跡（32）、岡山氏城跡（33）、出後氏館（34）、轟城跡（35）等、40余りの城館がある。これらは、室町中期以降から織田氏の伊賀攻めに備えた天正期の城が大部分と思われる。

# Ⅲ．向山２号墳の調査

## １．墳丘の調査

向山２号墳は、山田盆地南面の山地がなだらかな丘陵となる標高210m前後の丘陵の北端に築造された方墳である。調査上の墳丘主軸は、真北に対して、N－36°10′－E振り、北東を前面とする。

### (1) 調査前の墳丘

調査前の墳丘は、東側と西側がかなり削りとられ破壊を受けていた。現存の墳丘の高さは約3.6m程で墳頂も削平を受けていた。南側と北側はなだらかに下がっており、本来の墳丘のラインに近いものであると想定された。調査前の墳丘測量図からは標高208m前後のラインを墳裾とする円墳が想定された。

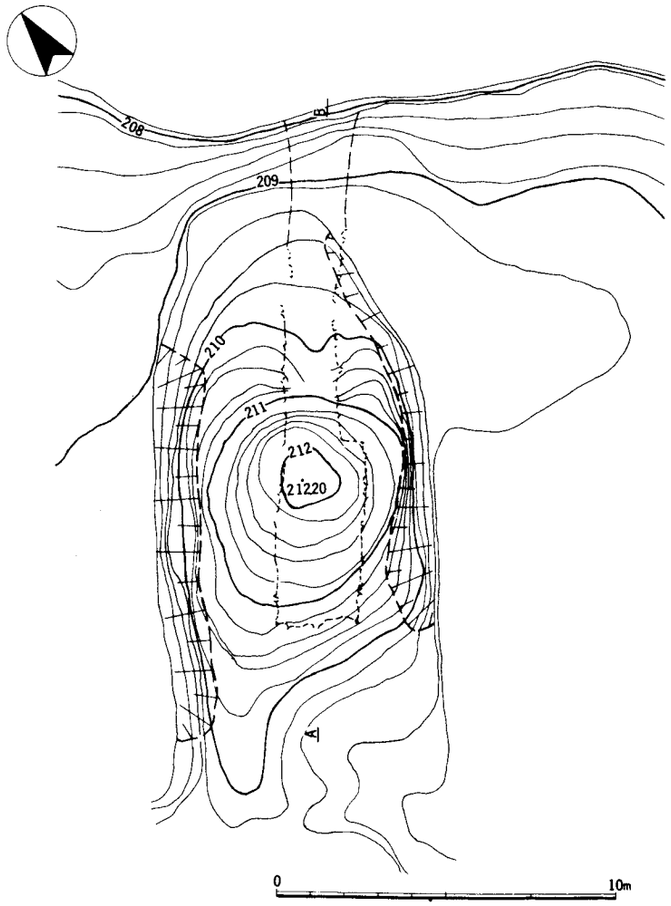
### (2) 墳　丘

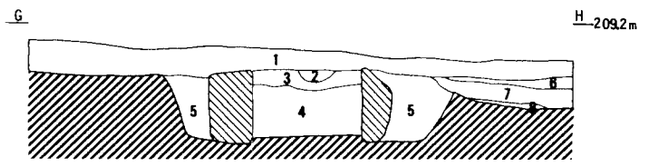
墳丘は、わずかに石室をとりまくかのように残っているだけで、かなり削平をうけており、特に西側においては耕作によりほぼフラットな状況であった。墳丘東側では周溝が検出され周溝の肩部は削平により旧状をとどめていないが、今、基盤層と盛土との変換点に墳裾を求めるならば、標高208.2mの標高を測る。西側では、土層観察用セクションE－Fに周溝の一部が確認され、標高208.4mの標高に墳裾を求めることができる。また、発掘区北側の土層観察用セクションK－Lにも周溝の一部が確認され、標高208.0mに墳裾を求めることができる。南側は、発掘区外のため確認はできなかった。これらから墳丘は、西から東へ、さらに南から北へと低くなっており、旧地形が反映されている。墳丘は、基盤を１mから1.8m掘り石室を築き、その上に全て盛土している。墳丘の傾斜角度は南側の比較的よく残っているところで約20度である。周溝をもとに、墳形を復元すると当初は円墳を想定していたが、東西16.5m・南北約20mと石室の主軸の方がやや長い方墳であることが確認された。

### (3) 盛　土

石室の奥壁基準点より0.5m・４m・７mの３ヵ所で石室主軸に直交する墳丘のたちわり、奥壁で主軸にそってたちわりの４ヵ所で調査を行ない盛土の状況を観察した。

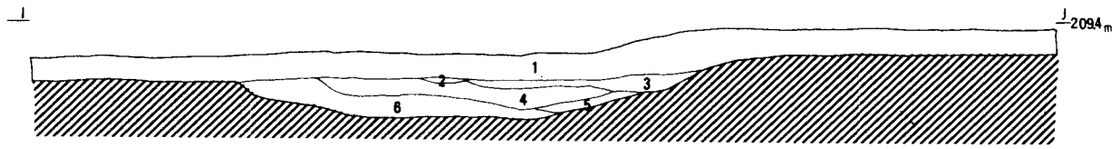
旧地表面は、削平されているところが多かったが基盤層に0.2～0.4mの厚さで堆積する黒色土と暗黄褐色土の混入土の上面にあたる。旧地表面は標高約208.8mで水平に拡がるが、旧地表が確認されたのは、４mラインG－Hの西側と７mラインI－Jの西側だけで他は削平され、盛土が行われている。現存する盛土は厚さ約3.6mを測る（G－Hで確認）。盛土は茶褐色土・黒色土・黄色土・黄褐色土・灰黄褐色土あるいはこれらの混入土等からなっており、



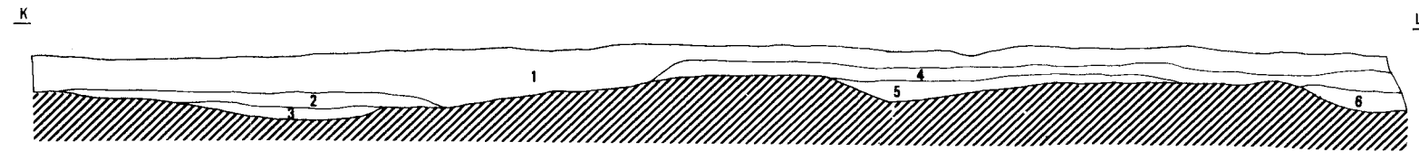




1．表土
2．黒色粘質土
3．黄茶色粘質土 } 玄室埋土
4．茶褐色粘質土
5．茶褐色粘質土（黒色土混入）石室掘り方埋土
6．明茶色粘質土
7．黒褐色粘質土
8．明茶色粘質土

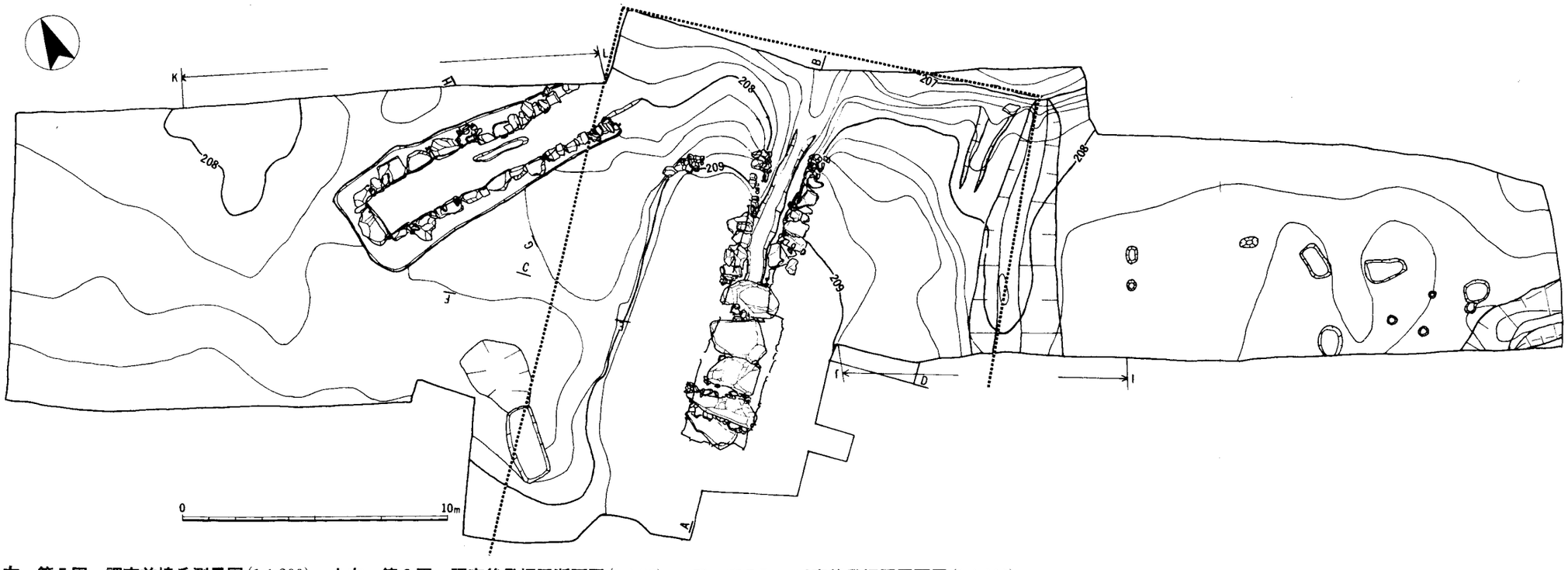
1．表土
2．黒褐色土（2号墳周溝埋土）




1．表土
2．黒灰色砂質土
3．黒灰色粘質土
4．黒褐色粘質土
5．黄褐色粘質土
6．黄褐色粘質土（砂礫含む）




1．表土
2．暗茶褐色土
3．暗灰褐色土
4．明茶色粘質土
5．黒褐色粘質土
6．黒褐色土
（2号墳周溝埋土）




上左・第5図　調査前墳丘測量図(1：200)　上右・第6図　調査後発掘区断面図(1：80)　下・第7図　調査後発掘区平面図(1：200)

周辺の旧地表面および基盤層から採取した土砂であり、砂礫を含むものもある。盛土は、基盤層を掘り込んだところで２工程・天井石までで２工程・天井石をおおいかぶせる形で１工程（おそらくさらに工程はあったであろうが現存では１工程）の５工程が概ね確認できる。奥壁部と羨道部あるいは左右両壁について若干の相違はあるものの概ね一致するようである。なお、盛土中には、縄文土器（第13図の77～91）や石器（第13図の92）弥生土器などを含んでいる。なお、現在の表土と表現している土砂も従来は盛土であったものが、削平後腐食したものである。表土には、中世の遺物を多く含んでいる。

(4) 外部施設

古墳の墳丘表面に施された外部施設としては、外護列石があげられる。しかしながら一部が僅かに残っていただけで全様は明らかでない。

# 2．主体部の調査

(1) 横穴式石室

**A　玄室**

玄室の平面は、長方形を呈し、玄室の長さは東壁で5.2m、幅は奥壁沿いで2.4m、西壁がやや張る中央付近で2.52m、袖部で2.28mを測る。天井部までの高さは奥壁沿いで2.68m、中央付近で2.8m、袖部で2.44mであり、ほぼ平坦であるが、奥壁は持ち送りされており、一番奥の天井石は、曲面を利用し、奥壁と天井とを弧状につなげている。四壁は転石を主体として構成しており、横位に通る目地が明瞭である。壁面には、顔料等を塗布した痕跡を認めない。

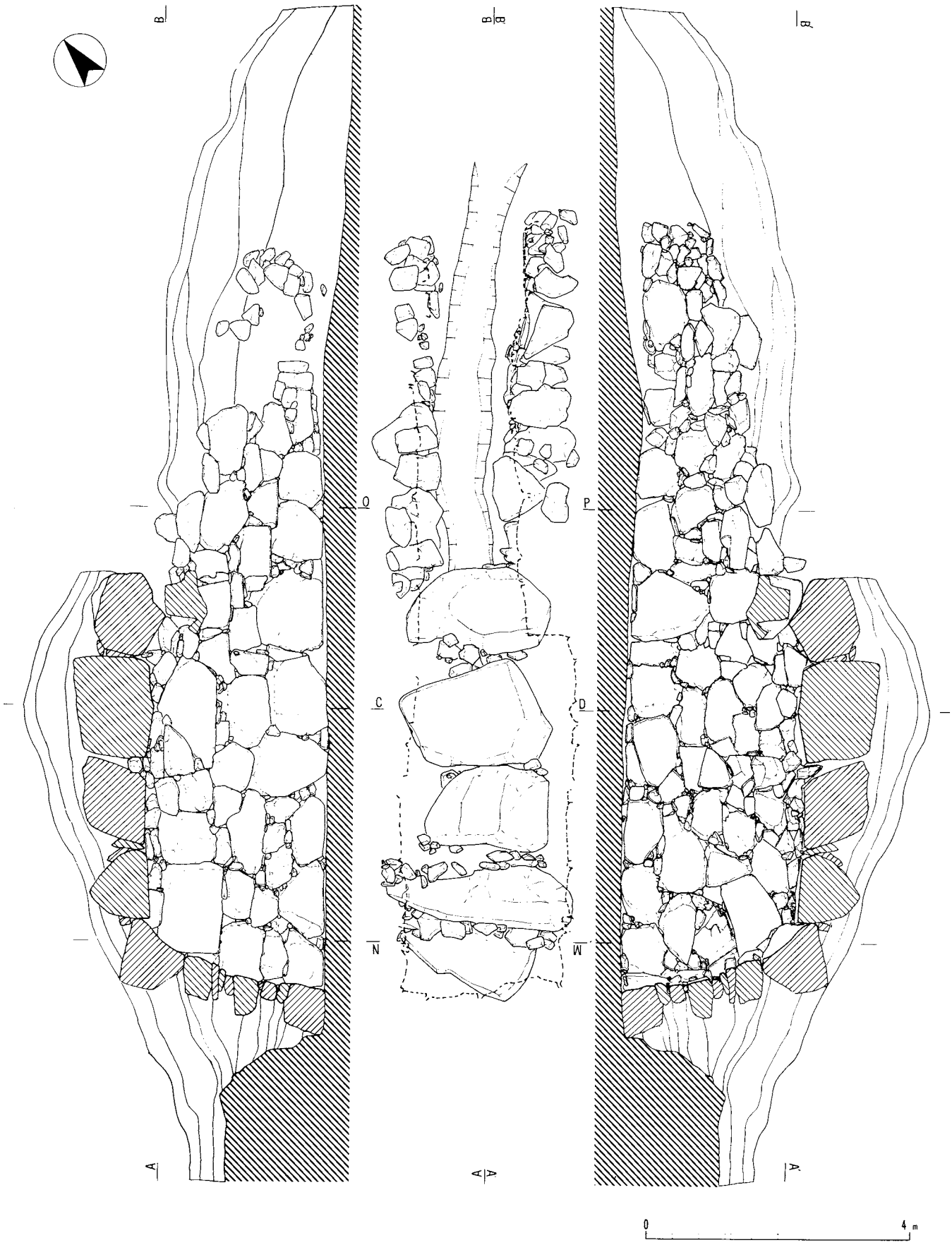
以下、項目を分け構築上の特色を記す。なお、混乱をさけるため、最初に用語を規定しておく。壁面に使用されている石材は、横位におかれていることを基本としているが、その際、高さをなす長さが0.3m～0.6mのものを中形石材、それ以下を小形石材、それ以上のものを大形石材とする。

**前壁**　裾部の基底には、高さ約1.2m、幅0.8m、奥行き0.8mを測る大形石材を縦位に置き、１石で前壁基底石としている。いわゆる、立柱石と呼ばれる石である。その上に高さ0.8m、幅0.6mの石材を乗せ裾部壁面を構成する。さらにその上に高さ0.6m、幅は途中で欠落して不明であるが推定幅1.5m以上、奥行き1.0mの石材が東隅を袖石部に乗せている。この石は、前壁の見上げ石であったろうが、何らかの理由で途中で欠落している。なお、玄室内に崩落していた石材の中にこの石と接合すると思われる石があった。見上げ石の壁面がなす角度は、石が動いているので不明である。東壁との組み合わせの関係は、見上げ石が東壁側へ入り込む状況を示している。

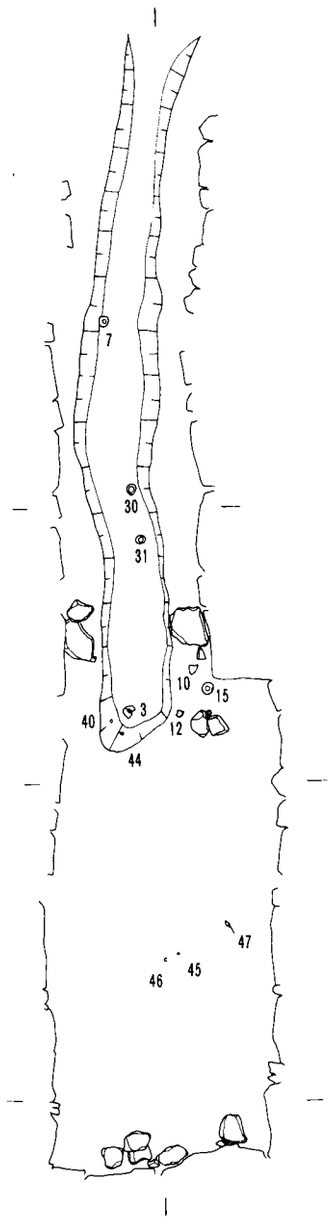
**東壁**　基底部には横位に幅0.8m～1.0mの大形石材を５石並べ、さらに、袖部の立柱石の高さまでもう１段横位に積んでいる。ここまでが１つのまとまった工程である。そして、見上げ石の下の高さまでもう１段あるいは２段中形石材を横位で組み合わせて積んでいる。これがまた１つの工程である。さらにもう１段今までとはやや違う小形石材を横位で積み、最後に小形石材を用いて高さの調整をしている。横位には目地が通っているが縦位には目地は通っていない。壁面の傾斜角度は、袖部立柱石の高さまでは、ほぼまっすぐであるが、それより上、つまり２工程以降の壁面では、約60度前後を測り持ち送りが顕著である。

**西壁**　基底部は、東壁の立柱石に対応する石まで大形石材を５石横位に並べており、奥壁から数えて４番目以降の石は高さが1.0m程で３番めまでに比べて大形の石を用いている。４番め以降の高さと同じくするために３番めまではさらに１段中形石材を横位に積んでいる。ここまでが１工程としてまとめられる。さらにこの上に横位に石材を１段積み、最後は、幅が1.5m前後の巨石を横位に１段積み、小形石材を用いて高さを調整している。大きく見ると３段積みで構築されている。東壁と同じく横位にはよく目地が通るが縦位には通らない。なお、東壁に比べて全体的に石材は大きく持ち送りは見られず壁面は傾斜していない。

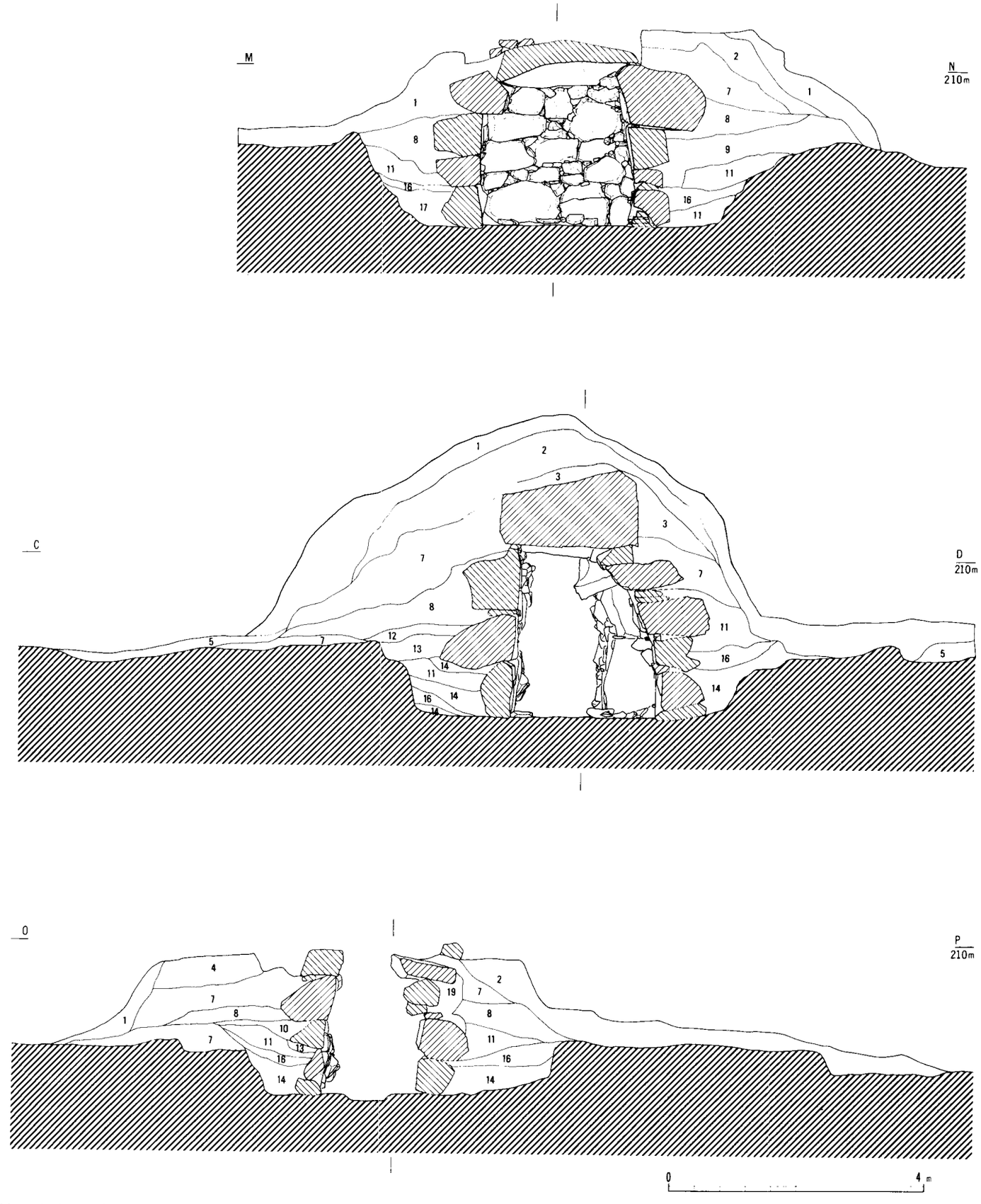
**奥壁**　基底部は、３石を横位に配置するが、西側は２段に積んでいる。さらに、袖部の立柱石上面相当の高さよりやや下がるまで小形石材を１段あるいは２段積んでいる。さらに見上げ石下面相当よりやや下がるまで中形石材を３石横位に積み、西側は小




**第8図　2号墳石室実測図**（1：80）




1．表土
2．茶褐色土
3．暗灰褐色土
4．黒色土
5．灰黄褐色土
6．黄色土
7．黒色土に暗黄褐色土混入
8．黄色土に暗黄褐色土混入
9．黄色土に暗黄褐色土・黒色土混入
10．黄色土に黄褐色土混入
11．黄褐色土に黄褐色砂礫土混入
12．黄褐色粘質土に黄褐色砂礫土混入
13．暗黄褐色土に黄褐色砂礫土混入
14．暗黄褐色土に黒色土混入
15．黄褐色土に黒色土混入
16．黄褐色砂礫土
17．黄褐色土
18．暗褐色土
19．根による腐色土
20．灰茶褐色土




**左　第９図　２号墳遺物出土状況**(1：80)
(数字は図版番号と対応する)

**右　第10図　２号墳墳丘断面図** (1：80)

形石材を３石積んで調整している。さらに、その上に大形石材、中形石材、小形石材を１～２段組み合わせて調整をしながら積んでいる。奥壁も横位に目地は通っているが、側壁の目地の通りとはやや下がってずれている。これは、奥壁最上部に１石で用いられている大形石材の使い方に起因するものと思われる。この高さまでの壁面の傾斜角度は、約80°で持ち送りをされている。最上部の大形石材は東西両側壁の上部に両隅が乗っており、天井石とも考えられるが、ここでは、持ち送りされてきた奥壁と天井石とを弧状に結ぶことを意識して、最後に乗せられており、奥壁の一部と考えておきたい。隅角をなす両壁面との関係は、両側の見上げ石下面相当の高さにあたる小形石材３石は、両壁面が奥壁側へ入り込んでいるが、他は全て東西両壁側へ奥壁面が入り込む状況を示す。

**天井石**　玄室には４枚の天井石が架構されている。天井部の長さは、約4.4m前後、幅は奥壁沿いで1.6m前後、前壁で1.2m前後を測り、前壁側が狭くなっている。石材の長さは、奥壁に近い方から天井石１とすると、天井石１が一番大きく2.8m、幅は天井石３が一番大きく1.6m、厚さは天井石３が1.2mと一番厚いがいずれも１m～２mを超える巨石が用いられている。天井石の目地には上から小石が挿入されてすきまを充塡している。

**B　羨道**

長さは東壁側袖部より石のなくなるところまでが6.2mである。幅は、袖部で1.6m、中央で1.4m、確認できる一番先端で1.4mで、中央付近からやや東へ振ってくるが、ほぼ一直線に伸びる。玄室壁と一連につながる西壁では東壁袖部に対応する位置に大形石材を縦位に置き基底石としており、壁面構築の際、袖部を意識していたようである。なお、天井石は１石も残っていなかった。残っていたならば、玄室前壁見上げ石よりも高い位置に天井石はくることが側壁の状況から想定される。

**東壁**　羨道東壁は、基本的には玄室東壁と同じ工程で積まれており、横位の目地も玄室東壁から通っている。しかし、先端の0.8m程は、工程を別とし、小形石材が５～６段積まれている。

**西壁**　羨道西壁も東壁と同じく基本的には玄室西壁と同じ工程で積まれており、横位の目地が通っている。東壁袖部に対応する大形石材から４m程で壁面は羨道内へ崩れ落ちていたが、やはり先端は、小形石材を５～６段積んでいるようである。玄室壁面と同じく東西両壁とも縦位の目地は貫いていない。

**C　前庭部**

羨道壁面がとぎれて墳丘斜面（先端がわずかに欠ける）までの長さ約3.5m前後が前庭部となる。確認しうる先端で幅約2.0m前後でやや東西に開いていくようである。両壁面とも黄褐色土、黄褐色砂礫土からなり、墳丘盛土が露呈していると考えられる。

**D　排水溝**

玄室袖部あたりから羨道壁面の石材がなくなるあたりまでに、幅0.6m～0.9mの素掘り溝が検出された。深さは0.1m～0.2mと非常に浅く、玄室袖部と先端との高低差は0.2mである。なお、この溝上に蓋をするような石材は確認されなかった。

(2)　遺物出土状況

横穴式石室内の遺物を検出する以前の状況をまず記しておきたい。調査前から既に袖部あたりから開口しており、玄室内へはかなりの量の土砂が流入していた。奥壁のあたりで0.4m～0.5m、袖部のあたりで1.0m～1.2m程の堆積が見られた。流入土の中には、袖部の見上げ石の崩落したと思われる大形石材の他にも数個の大形石材が見られた。流入土中には須恵器・土師器・瓦器・鉄鏃・銀環等の遺物を含んでおり、石室内はかなり荒されていることが想定された。よって、石室床面遺物は少なく、わずかに鉄鏃（第11図－47・48）、銀環（第11図－40～46）、須恵器（第11図－１～39）などがあるが、原位置を保っていると思われるのは、鉄鏃、銀環（第11図－45･46）の玄室中央付近で出土したものと、羨道部の排水溝上面で出土した須恵器（第11図－30･31）だけで、羨道の袖部近くで出土した須恵器・銀環はおそらく原位置を保っていない。なお、羨道部の中央付近で瓦器の出土する面があったが、土坑とかいった明確な遺構は確認されなかった。中世における墓室等の再利用が考えられる[22]。石室内の遺物は、埋葬された人数等から考えるともっと多かったと考えられるが、盗掘によって持ち去られたと考えられる。

# 3．遺　　物

## (1) 玄室内出土土器（1～25）

前述の遺物出土状況でも述べたように、玄室奥壁付近から玄門部に至る各所で出土の土器片が互いに接合できるものがかなりあり、完形品も数点に留まるところから後世の攪乱により大半が原位置を止めていないものと考えられる。出土土器の器種構成は、須恵器では図示し得なかった破片も含め、蓋杯19点（蓋10点、身9点）、無蓋高杯3点、台付長頸壺1点、短頸壺1点平瓶1点、提瓶1点、器台1点、土師器では甕1点、小形鉢1点があり、圧倒的に須恵器が多い。

蓋杯の身は、口縁部のたちあがりが低く、内傾の度合が大きいもので、底部は比較的偏平で浅い。全体的に小型品であるが、口径12.6㎝の大型のもの（1）、10.6㎝～11.4㎝の中型のもの（2～5）9.4㎝～10.0㎝の小型のもの（6～9）がある。器面の調整は底部外面を⅔以上ロクロの回転を利用しヘラケズリするもの（1、4、5、9）も認められるが、他はヘラ切りのままである。底部内面中央を指で押さえるもの（3）や、一方向ないしは不定方向の指なでを施すもの（1、4～8）が多い。蓋は大きく分けて天井部が丸く口縁部と天井部の境が不明瞭で器高の高いもの（10～13）と、天井部が平坦で天井部と口縁部との境が弱く屈折するもの（14～18）との二種がある。前者は後者に比べ口径が一回り大きく、焼成のあまい（10）、（11）のいずれかが身（1）とセットをなすものと考えられる。器面の調整は、天井部をロクロ回転を利用しヘラケズリするもの、ヘラ切り不調整のもの、ヘラ切り後なでるもの、板圧痕の認められるものなど様々であるが、特に天井部の大半をロクロヘラケズリするものが後者に多く認められる。底部内面中央部を一方向ないし不定方向になでるものが約半数ある。蓋の口縁部は丸く仕上げるものが多いが、内傾する面を有し、稜をつくるもの（10、13）や沈線により段をつくるもの（15）もある。蓋（13）の天井部下半には「＋」印のヘラ記号が描かれる。ロクロの回転は判明したものに限り、すべて身、蓋とも右回りである。

無蓋高杯は杯部2点、脚部1点がある。体部及び体部と底部の境に二本の突出した稜をもつもの(19)と体部から底部にかけて四条の沈線を施すもの(20)がある。脚部（21）は長脚二段透かしの下半部で、脚端部は下方に折れ外側に端面をつくる。透孔は三方にあく。

台付長頸壺（22）は細長く直線的に延びる頸部、やや肩の張った体部、細い基部から脚裾部で屈折し大きく外側に開く三方透かしの脚部からなる。肩部にハケ目を施し、体部下半と脚柱部にカキ目を施す。頚部と体部の接合の際左回りにしぼりをかける。胎土精良で焼成堅緻。⅔以上に自然釉がかかり、全体的に黒光りする良品である。

器台（23）は脚部のみである。脚裾部は屈折し端部は外側へ挽きだされて端部下面に安定した面をつくる。長方形の三方透かしや沈線で飾る。

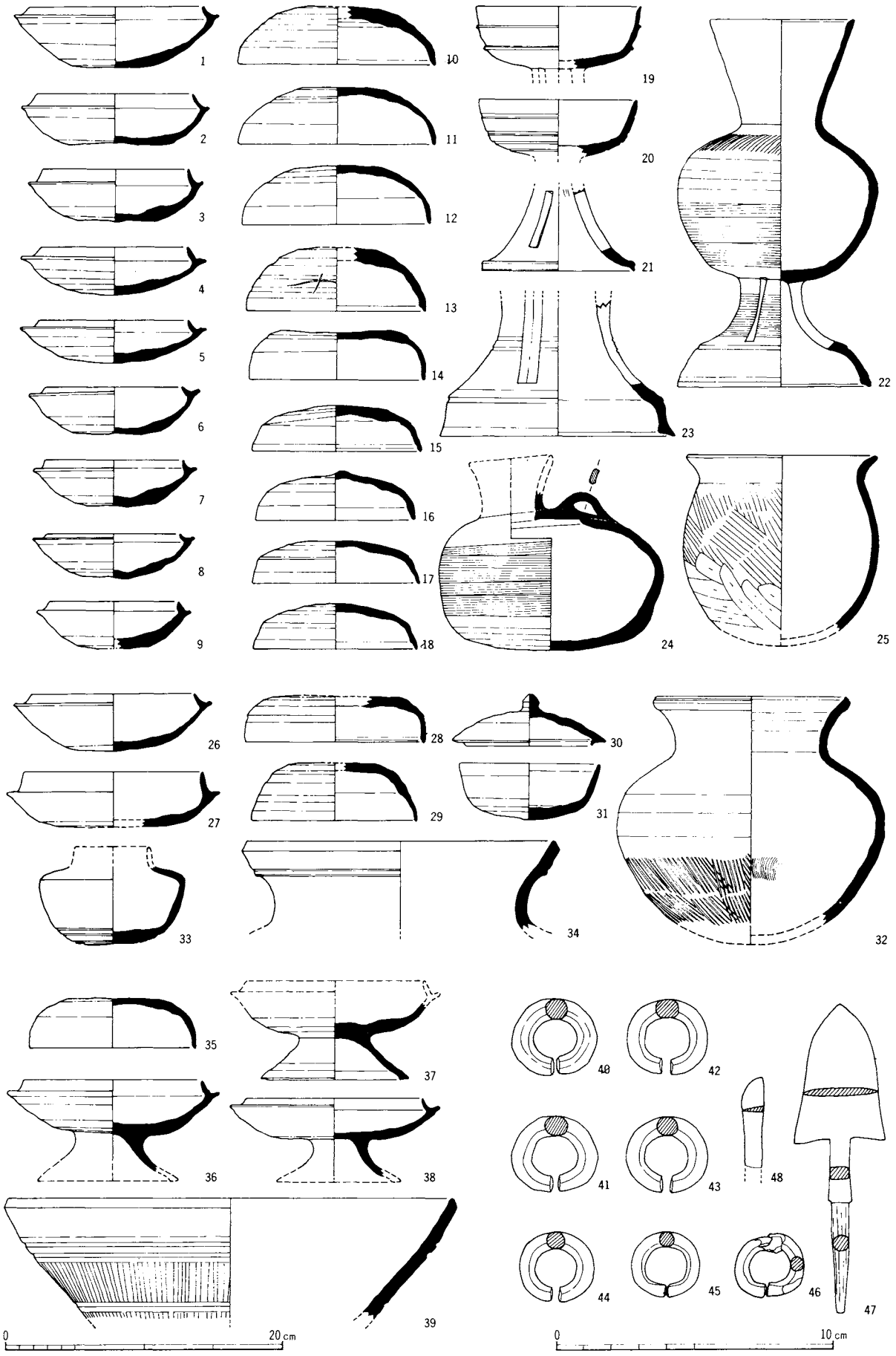
平瓶（24）は体部のつくりが提瓶と全く同じで、体部成形後、口縁部と環状把手を接合する。体部はカキ目を施し、底部は右回りのロクロでヘラケズリする。

土師器は甕（25）1点と図示し得なかった小形鉢1点のみが出土。甕は肩のあまり張らない球形の体部にくの字形に曲がる短い口縁部がつく。口縁部の中央がやや肥厚し、端部は丸く終わる。器面の調整は内面をなで、外面は体部上半を粗いハケ目、下半をヘラケズリする。

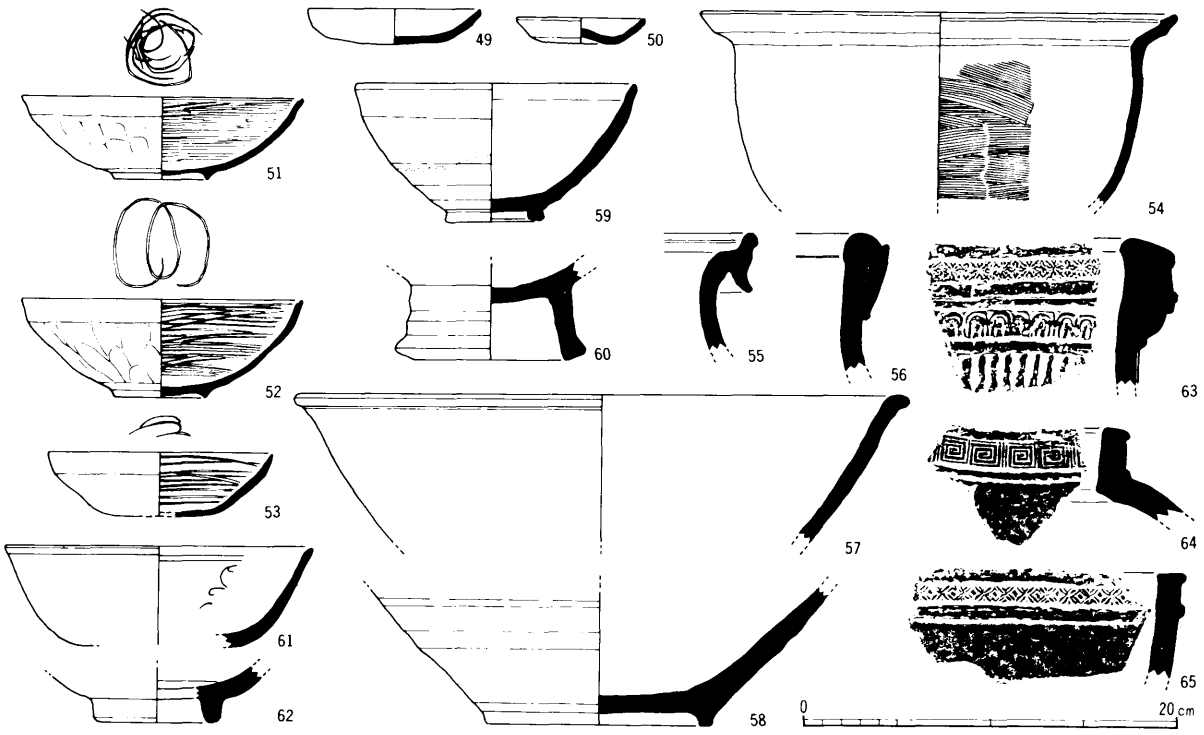
## (2) 羨道部出土土器（26～32）

羨道部床面、同入口付近及び埋土から出土したものですべて須恵器である。完形品は杯蓋（30）と杯身（31）のみで他は破片が多く、壺（32）は羨道部入口付近のものと玄門部埋土出土のものが接合する。なお羨道部床面上層から瓦器椀2点、瓦質鍋1点が出土しているが、後で中世の土器として一括して述べることにする。

蓋杯の身（27）は玄室内出土の身に比べ、口縁のたちあがりが長く、内傾度も小さい。同様に蓋（28）も天井部が平坦で、天井部と口縁部の境に幅の広い沈線条のなでがあり、口縁部内側は細い沈線が巡り段をなすなど前述の蓋杯に比べ若干古い様相のものが混在する。身（26）、蓋（29）は器形、調整の仕




第11図　2号墳出土遺物（1～39　1：4、40～48　1：2）




**第12図　中世の土器（1：4）**

方とも玄室内出土のものと同様である。宝珠つまみをもち、蓋内面のかえりを有する杯蓋（30）と受部をもたない杯身（31）はセットと考えられ、唯一新しい様相を呈しており、第二次埋葬の可能性が考えられる。

壺（32）はやや肩の張った体部に広口で短い口縁部がつく、口縁端部はやや丸く肥厚し、端面に一条の沈線が巡る。体部外面に平行叩き目文、同内面に同心円状の細かい叩き目文が一部残る。

短頸壺（33）は口縁部が欠損のため不明だが、肩の張る偏平な体部からなる。底部はヘラ切りのままでヘラ先のあたりが沈線状に巡る。

甕（34）は口縁部のみの破片。口縁部が弱く屈折し、屈折部外面に凹線が施される。

**(3)　墳丘、周溝出土土器（35～39）**

Ⅰ区墳丘裾部から須恵器有蓋高杯５点がまとまって出土したほか無蓋高杯片１点、壺片１点が出土した。また図示しなかったが周溝埋土からも須恵器杯蓋片、無蓋高杯片、甕片が各１点づつ出土している。

杯蓋（35）は玄室内出土のものと同一形態。

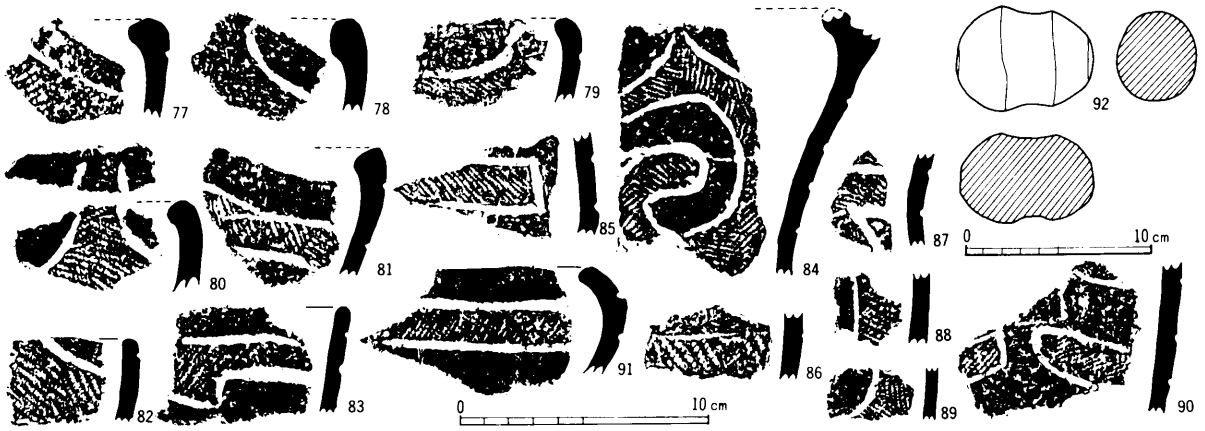
有蓋高杯（36～38）は蓋杯の身に八の字形に大きく開く脚部がつく。いずれも口縁部ないし脚裾部を欠く。37の脚端部下面はやや外傾気味の平坦な面をなす。セットとなる蓋は１点も出土していない。

器台（39）は口縁部が⅛残存。縦方向に櫛目を施したのち、沈線やなでが施される。櫛目原体は幅が2.9cmで櫛目は８本。

**(4)　銀環、鉄器類（40～48）**

銀環（40～46）はいずれも玄室床面で出土したもので銅地に銀箔を施したものである。銀箔の残りはあまり良くなく、緑青のふくものや銀が腐蝕し黒味を帯びるものが多い。40は長径3.0cm、短径2.8cm断面形0.8cm。41は長径3.1cm、短径2.8cm、断面形0.8cm。42・43は玄室奥壁付近から出土。42は長径2.9cm、短径2.7cm、断面は楕円形で0.7cm×0.9cm。43は長径2.9cm、短径2.7cm、断面形0.7cm×0.8cm。44は長径2.7cm、短径2.6cm、断面形0.6cm×0.7cm。45は長径2.5cm、短径2.3cm、断面形0.6cm。46は環の一部が折れているが長径2.5cm、短径2.2cm、断面形0.5cmを測る。以上の計測値から銀環40と41、42と43、45と46が一対となっていたものと考えられる。

鉄鏃（47）は偏平で幅広の平根式鏃で鏃身が三角形を呈する完形品。全長11.2cm、鏃身長5.0cm。鏃身幅3.3cm。茎部は断面方形で、こみ部は断面が丸




**第13図　墳丘盛土出土遺物（77～91　1：3、92　1：4）**

く木質が付着する。鉄鏃（48）は現存長3.2cm。細根族の先端部分で片刃の刀子形を呈する。

**(5)　中世の土器（49～65）**

羨道部床面埋土上層から出土の瓦器椀をはじめ、墳丘表土、周溝上層、墳丘東側平坦面等から瀬戸窯製品、信楽窯産の甕、青磁など中世の土器もかなり出土している。

土師器皿（49）は口径9.2cm、器高1.9cm。外面は指で押さえ、内面は不定方向になでる。皿（50）は底部中央がへこみ、所謂へそ皿と呼ばれるもの。口径6.8cm、器高1.4cm。

瓦器椀（51）は口径15.2cm、器高は4.4cm。内弯気味に大きく外へ開く体部にヨコナデされてやや外反する口縁部と低い三角形の高台が付く。体部は指オサエにより器面がでこぼこする。内面のヘラミガキは緻密でミガキ幅は1mm程である。底部中央見込みには、円状の雑なヘラミガキを施す。器壁は薄く胎土精良である。瓦器碗（52）は口径15.2cm～16.2cmと異びつで器高5.2cm。51に比べ内面のヘラミガキはやや粗い。内面見込みはラセン状の暗文が施される。いずれも口縁端部内側に沈線が入り段をなす。瓦器椀（53）は口径12.0cm、器高3.4cmと小ぶりで高台は付かない。口縁部はヨコナデされ、端部は細く尖がる。内面のヘラミガキは粗く、底部見込みは破片のため全体を知ることができないがラセン状の暗文が施されるようである。

瓦質鍋（54）は推定口径25.5cm。肩の全く張らない体部に端部を内側に折り返し内傾する平坦な面を有する口縁部が付く。体部内面は非常に細かい横方向のハケ目を施す。外面は全面に煤が付着。

信楽窯産の甕は口縁部のみの破片で、55は口縁端部が上下に肥厚し、56の口縁は端部を外側に折り返してN字状口縁となる。

擂鉢（57）は明褐色を呈し胎土に径3mm前後の砂粒を多く含む。内側の筋目はない。推定口径32cm前後。信楽窯産と思われる。

須恵器鉢（58）は八の字形に開く体部につくりの雑な角高台が付く。底部は未調整で体部下半を右回りのロクロで一気にヘラケズリする。ケズリ幅4.2cm。

灰釉平碗（59）は口径14.8cm、器高7.4cm。内面及び体部外面⅔に淡黄緑色の灰釉が施される。ロクロによるヘラケズリは体部上半までおよび、高台は貼り付け高台である。

灰釉花瓶（60）は、脚付尊式花瓶の脚部と思われ、底部外面の一部を残し脚部全面に淡緑色の灰釉が施される。59、60はいずれも瀬戸窯産であろう。

青磁碗は口縁部片（61）と底部片（62）がある。いずれも淡緑色を呈し、61の体部内側には平行線や曲線の毛彫文様がみられる。

火舎は円形（63、64）と方形（65）があり、口縁部に凸帯の区画を設け、その中を花柄、蓮華文、雷文などのスタンプ文様で飾る。64は瓦質である。

**(6)　その他の遺物**

2号墳、6号墳の墳丘盛土や石室埋土から少量ではあるが古墳築造以前の遺物として、縄文後期土器片、弥生中期～後期の土器片、叩石等も出土した。

縄文土器は、所謂磨消縄文と呼ばれる一群で、太沈線で区画された中に縄文を施文する。91のみ浅鉢型で他は深鉢型となろう。深鉢には、波状口縁のも

の（77～81）、平縁のもの（82、83）、口縁に突起物のつくもの（84）がある。波状口縁のものは、口縁端部が内側にやや肥厚するものが多く、沈線が口唇部までおよぶもの（80）がある。84は口縁部文様帯として弱い渦巻文が施文される。色調は全体に淡褐色系、灰褐色系のものが多く、胎土、石英、長石粒を多く含む。縄文はすべて２段Ｒ $\left\{\begin{smallmatrix}L\\L\end{smallmatrix}\right.$ が多く、撚りも細かくて硬い。これらの一群は、鈴鹿市東庄内Ａ遺跡出土の磨消縄文Ｂ$_1$種に類似しており、ほぼ同時期の縄文時代後期初頭に位置付けられよう。

弥生時代の土器は図示しなかったが、中期の甕、後期の広口壺、朱彩高杯等の破片がある。

叩石（92）は、長さ7.25cm、中央へこみ部分は、径4.21cm×4.72cmの楕円形で表面は平滑である。図面左側先端部に敲打痕があり、中央のへこみ部は擦痕がある。

# Ⅳ　向山６号墳の調査

## １．墳丘の調査

向山６号墳は、２号墳の調査中にⅡ区北西裾部において新たに発見された。調査上の墳丘主軸は、真北に対して、Ｎ－80°10′－Ｅ振り、東を全面とする。

(1)　墳　丘

墳丘は、盛土が全て削平されており、石室も基底石を１段残すのみである。石室掘り方は、基盤層を削りこんで、基盤のすぐ上に基底石を築いている。

## ２．主体部の調査

(1)　横穴式石室

**Ａ　玄室**

玄室の平面は、長方形を呈し、玄室の長さは北壁で4.8m、幅は奥壁で1.52m、中央で1.6m、袖部で1.6mを測り、ほぼまっすぐである。

以下、項目を分け構築上の特色を記す。なお、石材の規定については２号墳と同じである。

**南北両壁**　南北両壁とも基底石を一段残すのみである。北壁は、袖部の立柱石までに中形石材を５石並べている。南壁は、北壁の立柱石相当の石は大形石材を用いており、その石まで中形石材を４石用いている。石材は全て横位に用いられている。

**奥壁**　基底部は、幅1.4m程の大形石材１石を用い北側に小形石材を２段に積んで幅を調整している。隅角をなす両壁面との関係は、両側壁面が奥壁側へ入り込む。

**Ｂ　羨道**

羨道の先端部は、２号墳の築造により破壊されているが現存で、袖部より北壁で4.24m、南壁で4.8mである。石材はいずれも小ぶりの中形石材を横位に用いており、小形石材で高さを調整しているようである。南壁は基盤層に直接に接するのではない点が北壁と様相を異にする。

**Ｃ　前庭部**

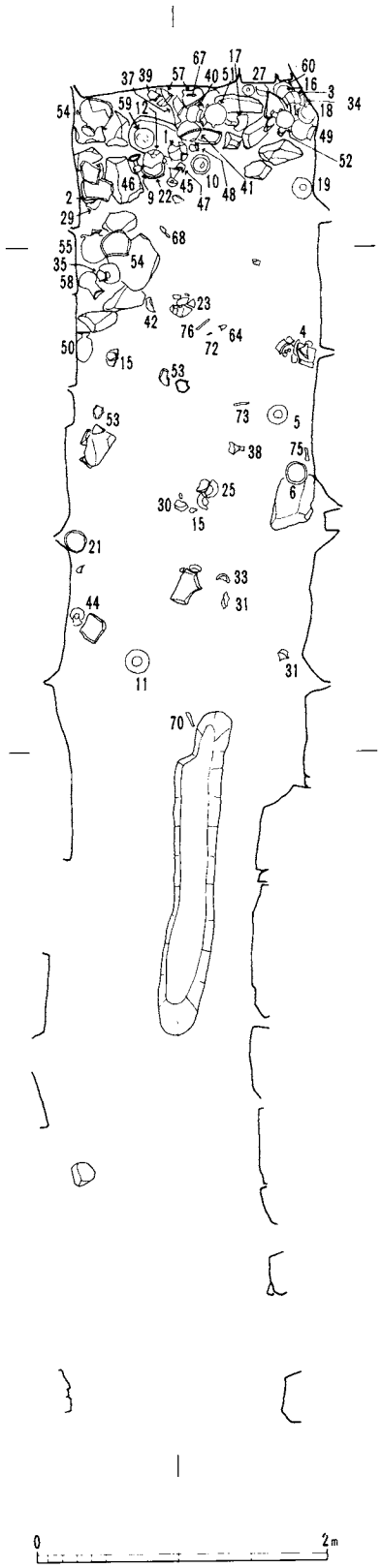
２号墳によって破壊されている関係で明確ではないが、石室掘り方が、南壁では羨道部の石が途切れるところで終っており、その先1.6m程が前庭部であったと考えられる。

**Ｄ　排水溝**

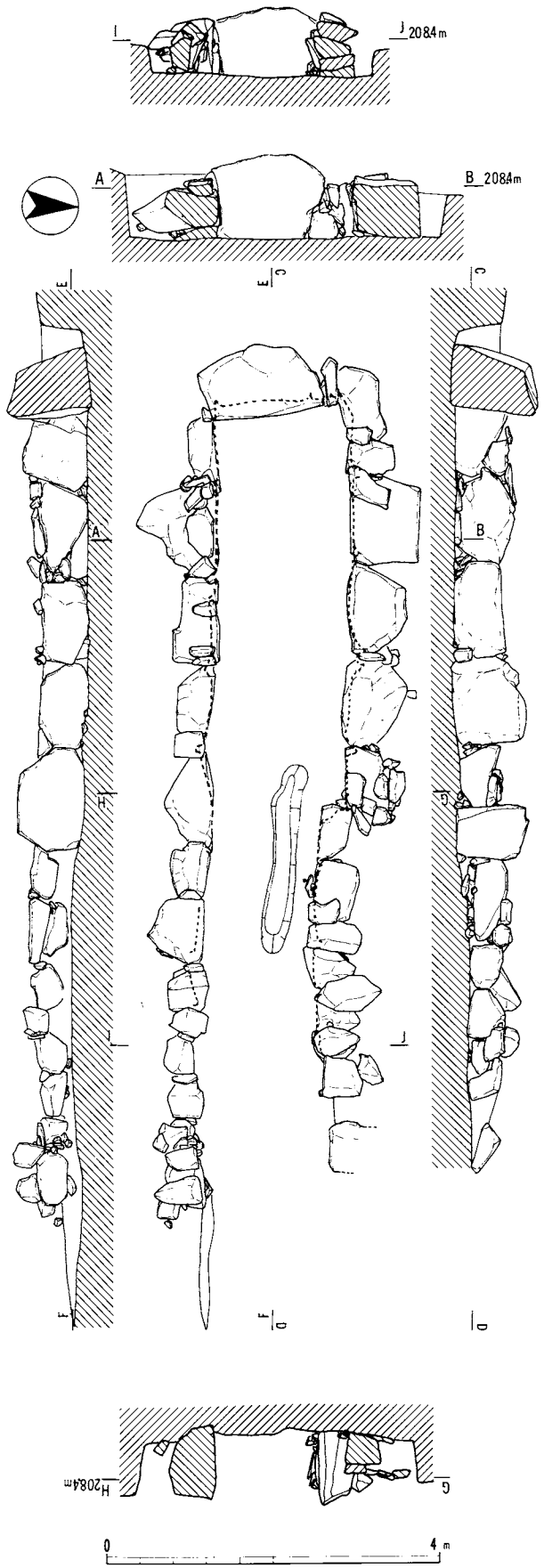
玄室袖部あたりからは現存の羨道部中央あたりまで幅0.25m、長さ2.2m、深さ0.1mの素掘り溝が検出されたが、おそらく排水溝の一部が残っているものであろう。

(2)　遺物出土状況

６号墳からは、土師器・須恵器・鉄鏃・刀子など多くの遺物が出土した。出土の状況は第14図の通りであるが、奥壁から0.5mに遺物が集中し、南壁際、北壁際に遺物はわずかに見られるが、中央付近には少ない。遺物は、ほとんどが完形あるいは、一部が欠けるだけのものが多い。遺物の向きは、不定でばらばらである。側石から崩れ落ちた石材の上に乗る遺物もかなりあり、石室が破壊された際に無意識に奥壁へかきよせられた可能性が強い。ただし、南北両壁際の遺物は、追葬により壁際にかたづけられた




第14図　6号墳遺物出土状況（1：50）
（数字は図版番号と対応する）




第15図　6号墳石室実測図（1：80）

可能性もある。石室床面に近い埋土は、水洗作業を行ない、遺物の検出にあたったが、ガラス製小玉等の遺物は検出されなかった。

## 3．遺　　物

### (1) 玄室内出土土器（1～61）

遺物は玄室内各所から出土しているが、特に奥壁付近に集中していた。内訳は須恵器53点、土師器7点（内3点はロクロ製）で圧倒的に須恵器が多い。須恵器の器種構成は、蓋杯32点（蓋17点、身15点）、有蓋高杯3点、無蓋高杯3点、壺1点、壺蓋1点、台付長頸壺2点、𤮈4点、提瓶7点、器台1点で完形品も多い。

須恵器蓋杯の身には、口径12.6cm～13.4cm、器高4.4cm～5.2cmで比較的薄手で長い内傾するたちあがりに丸くて深い底部が付く大型のもの（1～4）や口径12.1cm以下で短いたちあがりに浅い底部のつく小型のもの（14、15）もあるが、口径12.5cm前後、器高4cm前後のもの（5～13）が多い。器面の調整はいずれも底部をロクロの回転を利用したヘラケズリ調整を行う。また底部中央見込み部を二方向になでるもの（8、15）や同心円状のあて具痕を留めるもの（7、12）が若干みられる。色調は灰色又は青灰色を呈し、焼成良好なものが多いが、大型の身については灰白色を呈する生焼け品が目立つ。身（3、8）の底部外面にはそれぞれ一本線や「×」の印のヘラ記号が描かれている。蓋は天井部が丸く、器高の高いもの（16～27）と天井部が平坦で器高の低いもの（28～32）との二種に大きく分かれる。前者には身と同様、口径14.4cm～14.9cm、器高4.4cm～5.3cmの大型のもの（16～20）、口径13.8cm～14.0cmの中型のもの（21～24）、口径12.8cm以下の小型のもの（25～27）がある。大小を問わず天井部内外面にロクロ水挽き痕跡をよく留めるものが多い。後者も口径14.4cmの大型のもの（28）、口径13.8cm～14.3cmの中形のもの（29～31）、口径12.6cmの小形のものがあり、法量において前者と同様な対応関係が見い出せる。器面の調整は天井部ヘラ切り不調整のもの（26）、板圧痕を留めるもの（28）、ハケ目を施すもの（32）などが少量みられるが、他は天井部をロクロ回転を利用したヘラケズリを行う。また天井部内面中央部を一方向になでるもの（26）や同心円状のあて具痕跡を留めるもの（29、31）も若干みられる。蓋の約4割は口縁部内側に内傾する面や弱い段をもつ。蓋杯におけるロクロの回転は右回りが23点（72%）、左回りが8点（25%）、不明1点（3%）である。蓋と身のセット関係については、出土状況から判明しているもので身（1）と蓋（19）、身（11）と蓋（21）がある。法量から考えて大型の身と蓋は確実にセットとなろうが、中型以下のものについては、特に蓋が二種に分類できるのに対し身は明確に分けることができないのでセット関係を見い出すまでには至らなかった。

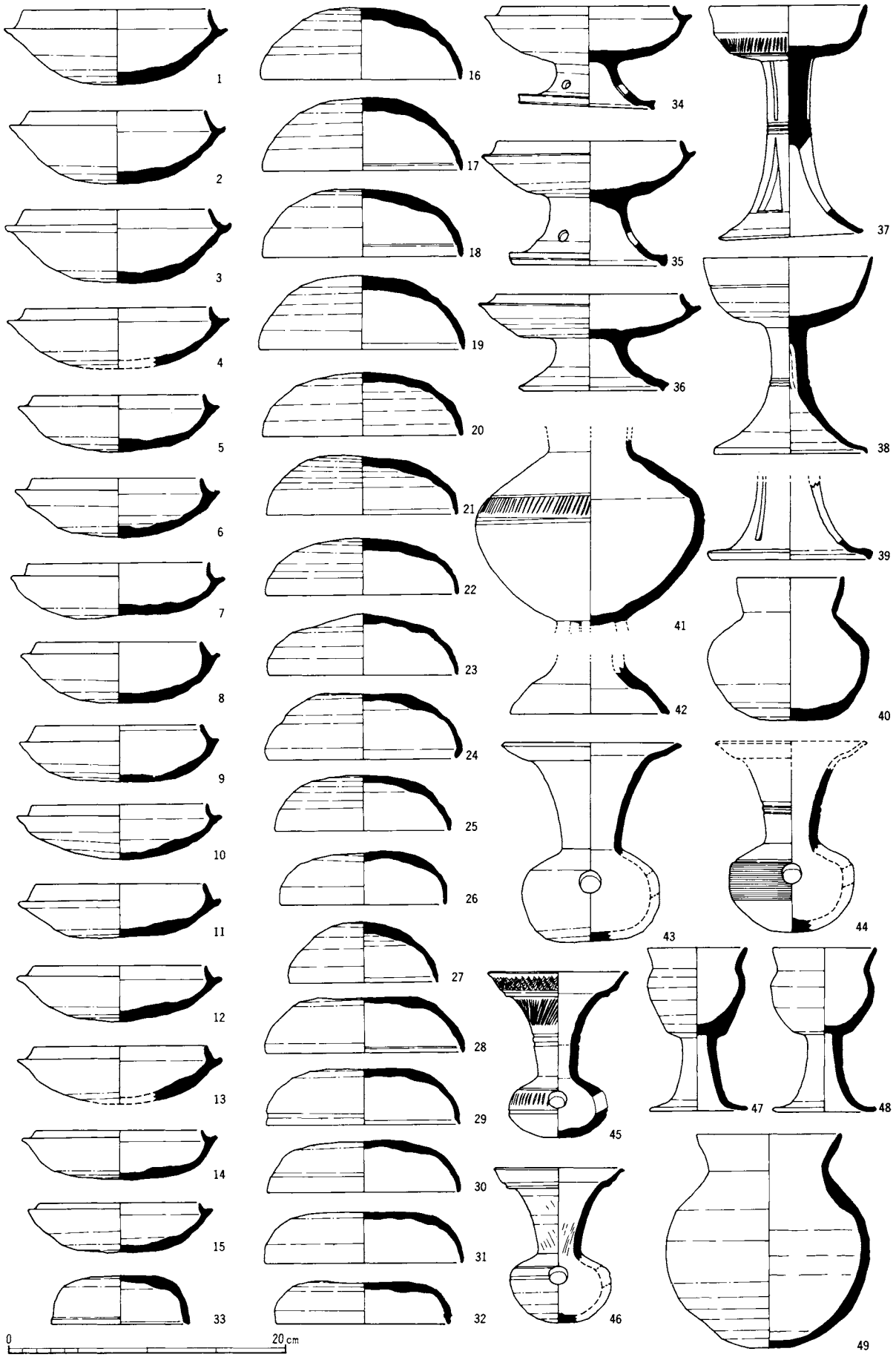
蓋（33）は口径9.8cmと小型で、壺の蓋となろう。

有蓋高杯は、蓋杯の大型の身に高台の付くもので、脚の基部は太く、脚裾端部は上下に肥厚し端面をつくる。脚柱部の三方に径4mm～5mmの円形の透孔があくもの（34、35）と透孔のないもの（36）がある。なおセットとなる蓋は1点も出土していない。

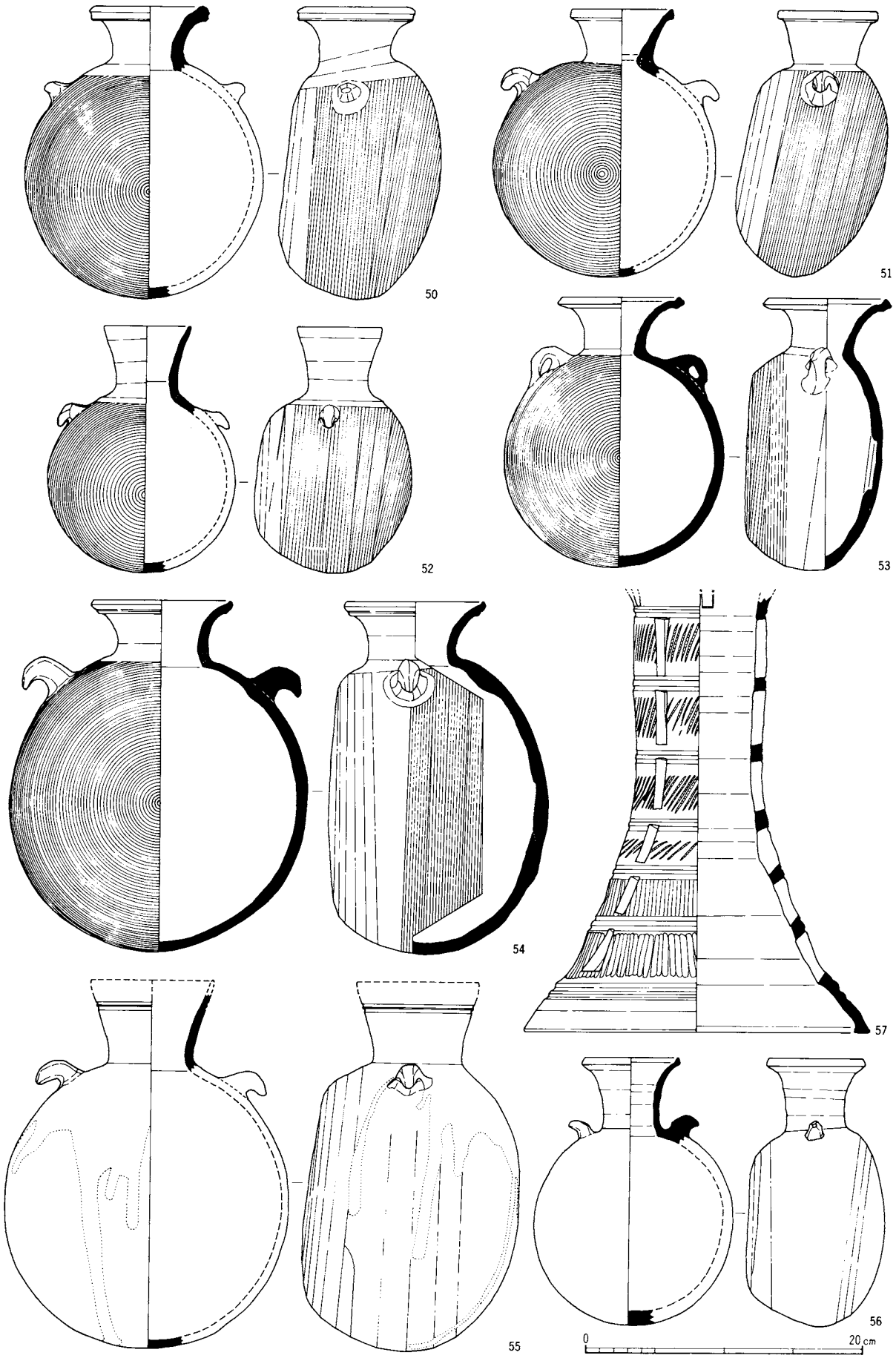
無蓋高杯は小さな杯部に細長い脚部が付く。37は体部中央に弱い稜線、底部との境に沈線を施し、この間を櫛描刺突文で飾る。長脚二段透かしの脚柱部は中央に二本の沈線を施し、上段に長方形、下段に三角形の透孔を三方にあける。なお上段は脚柱部が中身のため、透孔は貫通せず、透孔を意識したヘラによる切り込みが行われている。脚裾部はやや外側へ延びる。38は体部、脚部とも沈線のみで飾り、脚部の透孔はない。脚裾部は下方に折れる。いずれも黒灰色を呈し器面に光沢がある。39は三方に細長い長方形の透孔をもつ脚部片。

壺（40）は内弯気味にたちあがる口縁部に肩の張った体部が付く。底部は左回りのロクロでヘラケズリする。

台付長頸壺（41）は、口縁部と三方透かしの脚部を欠損する。体部中央を沈線により区画し、その中を櫛描刺突文で飾る。櫛目は最高10個まで確認。沈線は一周する段階でずれ、重複箇所が二本の沈線に見える。体部と肩部の境に粘土接合痕跡が明瞭に残る。42は別個体であるが脚裾部が屈折する台付長頸




第16図　6号墳出土遺物（1：4）




**第17図　6号墳出土遺物（1：4）**

壺の脚部と思われる。

甕は肩の張る体部に細長い頸部、屈折してさらに外側に大きく開く口縁部が付く。大型のもの（43、44）と小型のもの（45、46）があり、口縁部や体部に沈線を施すもの（44～46）、体部にカキ目を施すもの（44）、無文のもの（43）、口縁部、頸部、体部を櫛描波状文や刺突文で華麗に飾るもの（45）がある。

提瓶は7個体出土した。ほとんどが完形品で器高25cmを超える大型のもの（54、55）と17.8cm～20.9cmの小型のもの（50～53、56）がある。体部は前面が丸くふくれ、背面はほぼ平坦で、外反もしくは直線的に開く口縁部が付く。肩部には環状の耳が付く（53）以外はカギ状に折れる耳が付く。口縁部の形態は、上下に肥厚するもの（50、53、54）、下方に肥厚するもの（51）、上方に肥厚するもの（56）、まっすぐ延び丸く終わるもの（52、55）など様々である。器面の調整は、前面をカキ目、背面をロクロ回転を利用したヘラケズリを行うもの（50、51、54）、体部中央を除き前面、背面ともカキ目を施すもの（53）、前面をカキ目、背面はヘラ切りのままで、背面中央部を一方向になでるもの（52）、濃緑色の自然釉や灰かぶりのため調整が不明瞭であるが、前面、背面とも板状工具によるカキ目風のなでを施しているとみられる（55、56）がある。

器台（57）は脚部のみで、細長い脚柱部、ラッパ状に開く脚裾部から成る。7段の二条沈線により6つの区画を設け、上4つの区画を櫛描刺突文、下2つを縦方向の幅の広いハケ目状施文で飾る。透かしは下段のみ台形で、他は各区画毎に長方形の透孔が三方にあく。なお透孔の位置は均等に三分割されておらず、透かし上下の並びも斜めに傾いており、やや雑な仕上げである。最上段の透かしは以下の透孔位置に対し60°ずれる。

土師器は、長頸壺1点、高杯1点、甕2点、及びロクロ製の台付小型壺2点、壺1点が出土している。

長頸壺（58）は丸い体部にやや外反気味に長く延びる頸部が付く。体部下半、頸部、口縁部内面をハケ目調整する。体部中央には 5.8cm× 4.2cmの楕円形黒斑が付く。

高杯（59）は椀形の杯部に短い脚柱部、大きく開く脚裾部が付く。杯部と脚部の接合時につけ根をハケ目調整する。脚柱部には面取り風のなでがみられ、杯部内面には板状工具によるなで痕が認められる。

甕は肩の張らない偏平な体部にやや外反する口縁部が付くもの（60）と球形の体部にくの字形に曲がる口縁部が付く（61）とがある。60は体部下半と内面をヘラケズリし、61は体部外面全面を粗いハケ目で調整する。底部はハケ目がなで消され、体部内面には、粘土紐巻き上げ痕跡が明瞭に残る。

ロクロ製台付小型壺（47、48）は、須恵器の器形をそっくり模倣したものと考えられる。壺部分の形状が若干異なるが器高は全く同じで、器面はていねいにロクロなで調整される。明褐色を呈し、胎土、焼成共に良好。

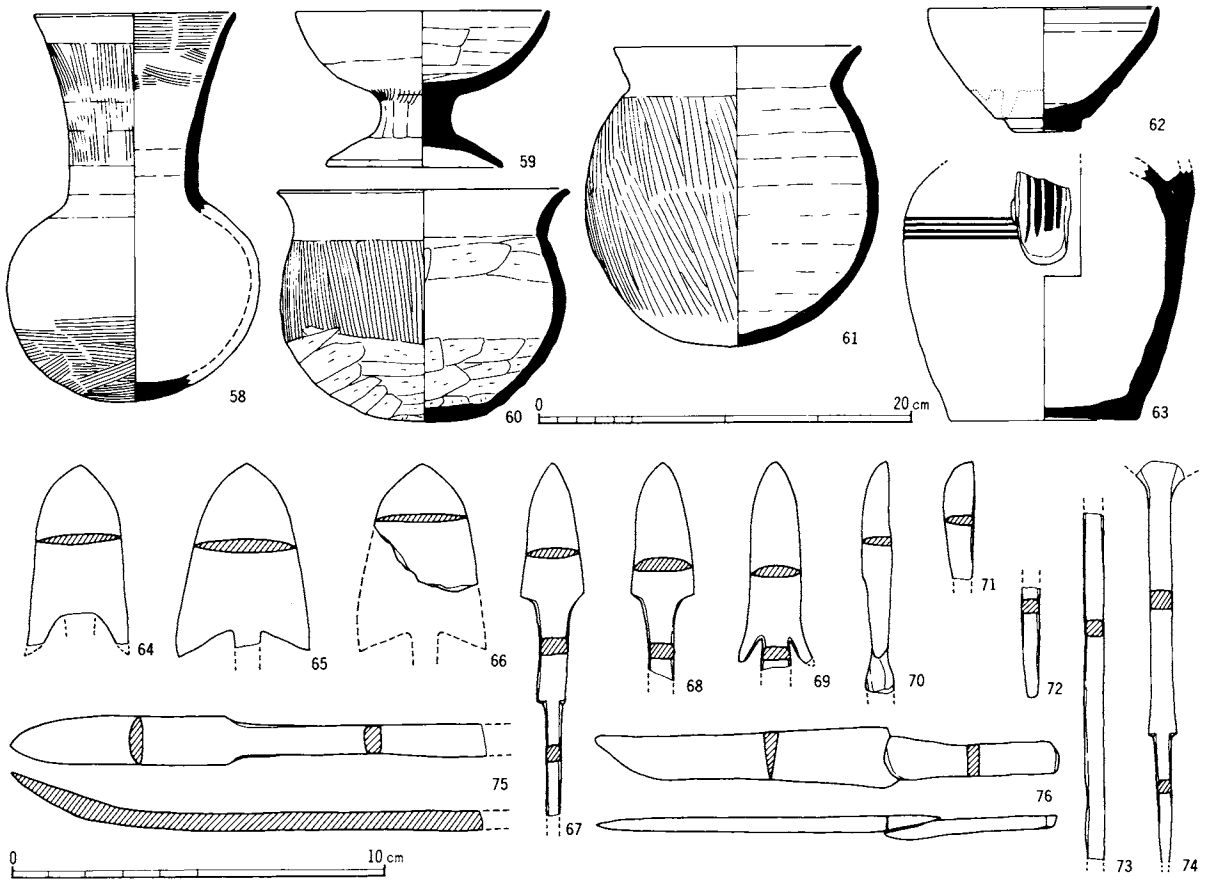
ロクロ製壺（49）は、焼成がやや軟質なものの完形品。球形の体部にくの字に曲がる口縁部が付く。体部内面には、粘土紐痕が残っており、あらかた器形を成形後、器面のロクロナデ調整が行われたことが分かる。体部下半から底部は右回りのロクロでヘラケズリ調整が行われる。

**(2) 玄室内埋土上層出土土器（62、63）**　2号墳と同様、6号墳でも石室内埋土上層から中世の遺物が検出された。天目茶碗（62）は口径12.2cm、高さ6.5cmでほぼ完形。粗地は淡茶色で黒色の鉄釉が施釉される。高台は削り出し高台である。灰釉手付水注（63）は肩部から上、及び体部を⅔ほど欠損する。淡緑色の釉が外面及び底部内外面に施される。

**(3) 鉄製品**

鉄鏃11点、鉈1点、刀子1点がある。いずれも石室内から出土。

鉄鏃は、平根式、柳葉式、尖根片刃式に大別できる。平根式鏃（64～66）は、すべて両丸造りの鏃身のみの残欠片で、三角形や略五角形を呈する。64は逆刺を有し全長 4.8cm。65は浅いわたくりがあり、鏃身長 5.1cm。柳葉式鏃（67～69）の鏃身も両丸造りで、茎部は断面長方形。67は茎部以下が残存する唯一のもので、鏃身長 3.5cm、茎部 2.8cm、こみ部 3.1cm。こみ部の断面は隅丸方形である。68は全長 5.8cm。69は逆刺を有し、鏃身長 5.3cm。尖根片刃式鏃（70、71）も茎部の大半を欠く。70は全長 6.2cm、鏃身長 3.2cmで、茎部下方に鉄の溶解塊が付着。71




**第18図　6号墳出土遺物（58～63　1：4、64～76　1：2）**

は全長 3.1cm。72～74は茎部の残欠で、72はこみ部先端部で全長 2.9cm。73は茎部で全長 9.3cm。74は茎部 6.5cm、こみ部 3.5cm。茎部断面はいずれも方形を呈する。

鉈（75）は全長12.6cm、身長 5.7cm。身幅 1.3cmで片丸造りに近い。先端部は細く光る。茎部は厚さ6mm、断面長方形。

刀子（76）は完形品で、刀身長 7.7cm、幅 1.4cm、茎長 4.6cm。身と茎の境は段があり、両者を溶接した痕跡が認められる。

# V　結　　語

### (1)　墳丘・盛土・外部施設

2号墳・6号墳ともに基盤層を削りこんで石室の基底石を据えている。2号墳では、石材を積む工程に対応して墳丘盛土を行なっている。盛土の高さは約3.6mであり、周辺の旧地表面および基盤層から採取した土砂を用いている。盛土の単位は水平堆積が基本であるが、必ずしも土砂の土質については東西両側において一致するものではない。

外部施設については、外護列石があげられるが、2号墳の墳丘裾よりやや上った位置、ちょうど、羨道部の側壁の石積がなくなり前庭とのさかいめの延長線上の位置にみられる。三重県内における外護列石をもつ古墳の分布のうち、伊賀地方で、中村3・10号墳[23]、上山9号墳[24]、辻垣内1号墳[25]（以上名張市）や波敷野古墳群（阿山町）中の8基[26]、横枕2号墳[27]、前山1号墳[28]（大山田村）、塚原古墳[29]（青山町）などがみられ、名張市と阿山郡の周辺に分布の中心をもっている。こららを時期的にみるならば、名張市の上山9号墳や中村3号墳では6世紀前半には既にみられるのに対し、大山田地域では、向山2号墳も含め6世紀後半であり、この地域における外護列石の採用は6世紀後半まで遅れるようである[30]。

### (2) 2号墳石室の構築過程

石室の構築過程は、大きく分けると袖部の立柱石の高さ相当まで、前壁見上げ石下位相当まで、見上げ石の高さ相当までと3単位としてとらえられる。以下石室構築過程を説明する。

Ⅰ 石室掘り方の掘削－石室掘り方は基盤層を1mから1.8m掘りこんでいる。

Ⅱ 基底石の配置から袖部立柱石までの構築－東西両壁の方が奥壁・前壁より先行して設置される。東壁は、立柱石の高さまで2段積み、西壁は、立柱石相当の高さまで奥壁から3番目の基底石までは2段積み、以後は大形石材を用いて1段積みである。石室の構築は、玄室と羨道と分けることなく、玄室から羨道と工程は続けて行なわれている。

Ⅲ 見上げ石下面までの構築－前壁の立柱石上の大形石材が優先して1段積まれ、中形石材を1～2段横位に組み合わされて東壁を積んである。西壁は1段大形石材を横位に積んでいる。東西両壁が奥壁より優先している。

Ⅳ 見上げ石の架構から天井石下面までの構築－前壁の見上げ石がまず架構される。そして、東西両壁が構築されるが、東壁が小形石材を用いているのに対して西壁は大形石材を用いている。これは、東壁が約60度前後の角度で持ち送りされているのに対して西壁は持ち送りせずに構築されている差によるものである。天井石下位面は、小形石材を用いて調整を行っている。ここまでの工程が終った段階では東西両側壁と奥壁との間では高さのずれが生じているが、これは奥壁の最上部の石材の孤状を有効に利用するために意図的に行われているものである。

Ⅴ 天井石の架構－天井石を玄室上で4枚架構しているが、羨道にも本来天井石があったと思われる。羨道部の天井石は現存の東西両側壁の高さから想定すると、前壁の見上げ石よりも高い位置になる。

Ⅵ 奥壁の架構－最後に奥壁最上部の大型石材を東西両壁の上部に乗せて架構し、石室は完成する。

### (3) 石室の形態について

向山2号墳は、右片袖式の石室であり、向山6号墳は左片袖式の石室である。これは、等高線を考えた場合、どちらも傾斜の低い方である。かって、高安千塚の群構造の調査をされた白石太一郎氏は、片袖式石室の場合、袖の位置の左右に特別な意味はなく傾斜の低い方に複雑な袖のある方をもってくると指摘されている[31]。本調査の例もそれに該当するのであろう。

向山2号墳と6号墳の石室の平面形態を比較するといずれも玄室は長方形を呈する。2号墳の玄室比（奥壁幅:玄室長）は1：2.2である。これに対して6号墳の玄室比は1：3.0である。横穴式石室の変遷の研究からは、新しくなるほど玄室長がながくなる傾向が知られている[32]が、両古墳の場合、出土遺物などの比較から古いと考えられている6号墳の方が石室の平面形態は新しい要素をもっている。6号墳については、基底部しか残存していないため、石室の全様は不明であるが、周辺の古墳と比較すると6世紀後葉の築造と考えられる横枕2号墳が玄室比1：2.9と近い数字を示す。

### (4) 内部主体について

向山2号墳は、盗掘を受けており、出土遺物については、古墳の営まれた頃の全様を窺い知ることはできない。また、6号墳についても、石室は基底部を残すのみで削平を受けており、遺物は残っていたがかなり動いており原位置を保っているものは少ない。こういった諸条件の制約はあるが、これまで周辺地域で調査された例と比較検討してみたい。

まず、内部主体であるが、6世紀前半の造営と考えられる西谷1号墳では、木棺直葬の内部主体である。これに対して、群集墳の内部主体として横穴式石室がとりいれられるのは、6世紀半ばでも前半頃の築造と考えられる下中島2号墳であり、この石室は、竪穴系横口式石室の系譜をひくものである。6世紀後半になると、辻堂古墳や前山1号墳、神林7号墳、横枕2号墳などの横穴式石室を内部主体とする古墳が築造される。このことは、後期の群集墳における内部主体の多様性を示すものであるかもしれないが、あるいは、この地域において横穴式石室が群集墳の主体部として普及するのは6世紀の半ば以降であるのかもしれない。また、辻堂古墳、神林9号墳では組み合わせ式石棺をもっていたが、向山2・6号墳ともに、石棺の痕跡はなかった。

### (5) 遺物について

2号墳については、盗掘によりかなり荒らされており、玄室の遺物と羨道埋土の遺物が同一個体であったりしている。主な遺物は盗掘の際に消失していると考えられるが、わずかに玄室に残っていた遺物は、ＴＫ209およびＴＫ217併行[33]のものであり、築造の時期と営まれていた時期の一端が窺える。

6号墳については、かなりの遺物の出土を見たが、原位置を保っているものは数少ない。出土遺物は、ＴＫ43およびＴＫ209併行[34]と考えられる。また、鉄製品も少なく、玉類については皆無であった。また、ロクロを使用したと思われる土師器3点（第17図の47・48・49）が出土しているが県内では他に類例がないものである。被葬者の性格を考える上で興味深いものである。

2号墳・6号墳の蓋杯のあり方であるが、ともに大型のもの・中型のもの・小型のものとに分けることができるが、2号墳の方が全体的に小型品である。また、蓋はともに天井部が丸く、器高の高いものと、天井部が平坦で器高の低いものとの二種に大きく分かれる。このような大・中・小、あるいは高・低のあり方は、服部川をはさんだ対岸の辻堂古墳の第一次埋葬遺物の蓋杯のあり方と似ており興味深い。

### (6) まとめ

今回調査を行った向山2号墳の横穴式石室は、伊賀地方でも有数の規模を誇るものであり、その残存状況も非常に良いものであった。既に盗掘をうけたため、石室内はかなり荒れており、土砂が流入していた。このような状況なので遺物の出土状況は良くないが、出土遺物より2号墳の営まれていた時期は7世紀初頭から7世紀前半と考えられる。

2号墳の北西裾部は6号墳の石室の一部を破壊しているが、2号墳の東側には充分な余地があるにもかかわらず、あえて何故破壊してまで築いたのか疑問が残るところである。この場合、完全に6号墳が破壊されてしまったのか、一部だけ破壊され玄室は残っていたのかは削平により確認できなかった。

6号墳の営まれていた時期は、出土遺物が奥壁へかき寄せられたような状態になっており、追葬などの検討はできないが、6世紀後半から7世紀初頭である。よって、7世紀初頭のある時期に2号墳が築かれたと考えられる。

向山2・6号墳をはじめとして、伊賀地方、特に大山田地域では規模の大きな石室が造営されているが、これらを築くことのできる集団の政治的な背景については今後検討していかなければならない。

向山2号墳の西側及び東側にみられる平坦部であるが、ここから及び墳裾からは中世の土器が出土している。瀬戸窯の製品としては、第12図の59・60、第19図の62・63があげられる。このうち63の灰釉手付水注は、井上喜久男氏によれば、瀬戸Ⅲ前半期（13世期末～14世紀前半）のもので、伊賀地方出土の例では最古の例である[35]。また、同時期に併行する信楽窯産の甕（第12図の55・56）、擂鉢（第12図の57）も出土しており、向山2・6号墳の削平が遅くともこの時期には行われていたようである。積極的に城館というべき遺構は確認されなかったが、遺物からは何等かの施設が13世期末から14世紀前半には築かれ、15世紀代まで続いていたことが窺える。

向山2号墳羨道部上層からの瓦器椀・瓦質鍋（第12図の51・52・54）は13世紀前葉のもので[36]、石室を墓室として最利用したものと考えられる。

13世紀前葉には墓所として意識されていたこの向山古墳の地は、13世紀後半にはその意識も薄れ、開発されているのである。

**註**

①『大山田村史　上巻』　大山田村　1983年

②前掲①に同じ

③中山暁ほか　「永井氏城跡」『昭和58年度農業基盤整備事業埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会　1984年

④駒田利治　「山出遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1980年

⑤前掲①に同じ

⑥櫪本杜人　『三重考古図録』　1954年
三重大学歴史研究会原始古代史部会　「阿山郡大山田村鳴塚古墳および多気郡明和町坂本一号墳について」『ふびと』30号　1969年

⑦吉村利男　「高猿6号墳」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』　三重県教育委員会　1981年

⑧森川桜男ほか　『辻堂古墳発掘調査報告書』　大山田村教育委員会　1973年

⑨前掲②に同じ

⑩前掲①に同じ

⑪前掲②に同じ

⑫三重県教育委員会　『三重県埋蔵文化財年報15』　1985年
⑬三重県教育委員会　『三重県埋蔵文化財年報16』　1986年
⑭三重県教育委員会　『三重県埋蔵文化財年報17』　1987年
⑮森前稔ほか　「西沖遺跡」前掲⑦に同じ
⑯中森英夫　「歌野遺跡」『昭和57年度農業基盤整備事業地域文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1983年
⑰森前稔　「蓮池代遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』　三重県教育委員会　1982年
⑱前掲①に同じ
⑲森前稔　「田中遺跡」　前掲⑯に同じ
⑳山下雅春　「山出遺跡」　前掲⑰に同じ
㉑前掲⑬に同じ
㉒辰巳和弘ほか　『下司古墳群』同志社大学校地学術調査委員会　1985年
㉓水口昌也・門田了三　『名張市遺跡調査概要』　名張市教育委員会　1978年
㉔名張市遺跡調査会　『上山古墳群』　現地説明会資料　1986年
㉕森前稔・駒田利治ほか　「辻垣内遺跡・上東野遺跡」前掲⑯に同じ
㉖皇学館大学考古学研究会「波敷野古墳群測量調査報告」『三重考古』第３号　1980年
㉗中森英夫　「横枕１・２号墳」　前掲④に同じ
㉘前掲⑫に同じ
㉙仁保晋作　『塚原古墳発掘調査報告』　青山町教育委員会　1982年
㉚安濃町遺跡調査会　『平田古墳群』　1987年　において竹内英昭氏が指摘している。(P315)
㉛白石太一郎　「畿内の後期大型群集墳に関する一試行――河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として――『古代学研究』　42･43合併号　1966年
㉜前掲㉛など
㉝田辺昭三　『須恵器大成』　1981年
㉞前掲㉝に同じ
㉟井上喜久男　「伊賀地方出土の中・近世陶磁について」『菊永氏城跡発掘調査報告』　阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会　1987年
㊱山田猛　「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』　日本中世土器研究会　1986年

| 器種・器形 | 土器No | 法量(cm) 口径 | 器高 | 最大径 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | ロクロ回転 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 | 登録No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| **2号墳玄室内出土土器** | | | | | | | | | | | | |
| 須恵器蓋杯（身） | 1 | 12.6 | 4.4 | 14.9 | ・口縁部のたちあがりが低く、内傾の度合いが大きい。<br>・底部は比較的扁平で浅い。 | ・底部は回転を利用したヘラケズリ調整の1、4、5、9以外は、ヘラ切り不調整<br>・底部は内面見込部を4～8は一方向になでる。<br>1は不足方向なで。<br>3は指で押さえる。 | 右 | 良 | 軟 | 黄灰色 | | 55 |
| | 2 | 11.4 | 3.6 | 13.7 | | | 右 | 良 | 〃 | 暗灰色 | | 4 |
| | 3 | 10.6 | 3.7 | 13.8 | | | 不明 | 白色小石やや多い | 〃 | 青灰色 | 黒色斑点有り | 7 |
| | 4 | 10.6 | 3.4 | 13.4 | | | 右 | 〃 | 〃 | 青灰色 | | 36 |
| | 5 | 10.7 | 3.2 | 13.5 | | | 右 | 石英白色小石多い | 〃 | 青灰色 | | 20 |
| | 6 | 10.0 | 3.4 | 12.4 | | | 不明 | 白色小石多い | 〃 | 黄灰色 | 自然釉底部全面にかかる | 8 |
| | 7 | 10.1 | 3.3 | 11.9 | | | 右 | 良 | 〃 | 暗灰色 | | 6 |
| | 8 | 9.8 | 3.2 | 11.8 | | | 不明 | 石英少量 | 〃 | 灰色 | 重ね焼痕有り | 5 |
| | 9 | 9.4 | 3.4 | 11.1 | | | 右 | 良 | 〃 | 青灰色 | | 37 |
| 須恵器蓋杯（蓋） | 10 | 14.4 | 4.1 | 14.4 | ・天井部が丸く、口縁部との境が不明瞭 | ・天井部ロクロヘラケズリ<br>・天井部ヘラ切り不調整。内面中央部不定方向なで<br>・天井部ヘラ切り後なで。内面中央部一方向なで<br>・天井部に板圧痕有り | 右 | 小石微量 | 軟 | 灰白色 | | 13 |
| | 11 | 14.0 | 4.1 | 14.0 | | | 右 | 石英微量 | 並 | 黄灰色 | | 12 |
| | 12 | 13.7 | 4.2 | 13.7 | | | 右 | 白色小石微量 | 〃 | 灰色 | | 11 |
| | 13 | 13.0 | 4.6 | 13.0 | | | 不明 | 精良 | 硬 | 青灰色 | 天井部の下方に×印のヘラ記号 | 14 |
| | 14 | 12.8 | 3.5 | 12.8 | ・天井部が平坦で天井部と口縁部との境が弱く屈折。 | ・天井部の大半をロクロでヘラケズリするものが多いが、ヘラ切り後なでるもの(16)や板圧痕のつくもの(14)もある。<br>・口縁端部は丸い。<br>・内面中央部を一方向になでる。 | 不明 | 砂粒多い | 並 | 黒灰色 | | 10 |
| | 15 | 12.6 | 3.3 | 12.6 | | | 右 | 白色小石少量 | 硬 | 暗青灰色 | 口縁端部内側に沈線有り | 3 |
| | 16 | 11.6 | 3.5 | 11.6 | | | 不明 | 白色小石多い | 並 | 暗灰色 | | 9 |
| | 17 | 12.1 | 3.1 | 12.1 | | | 右 | 〃 | 硬 | 黒灰色 | | 34 |
| | 18 | 12.0 | 3.3 | 12.0 | | | 右 | 〃 | 並 | 青灰色 | 口縁端部内側に内傾する面有り | 15 |
| 須恵器無蓋高杯 | 19 | 12.0 | — | — | ・杯口縁部と底部の境に二本の突出した稜をつくる。<br>・杯口縁部から底部に4条の沈線を施す。<br>・脚部のみ。脚裾部は下方に折れる。3方透かし。 | ・内外面ともロクロなで調整。 | 不明 | 〃 | 〃 | 黒灰色 | 内面灰かぶり | 16 |
| | 20 | 11.4 | — | — | | | 不明 | 良 | 〃 | 灰色 | | 39 |
| | 21 | — | — | 脚径11.0 | | | 不明 | 〃 | 〃 | 青灰色 | | 19 |
| 須恵器台付長頸壺 | 22 | 10.4 | 26.5 | 脚径13.6 | ・口縁部はまっすぐ延びる<br>・脚裾部は屈折し外へ開く。 | ・肩部にハケ目、体部下半と脚柱部にカキ目を施す。 | 不明 | 〃 | 硬 | 黒灰色 | 器面に光沢有り三方透かし。 | 21 |
| 須恵器器台 | 23 | — | — | 脚径17.0 | ・脚裾部は屈折し、端部は外側へ肥厚する | ・脚部に沈線を施す。<br>・三方透かし。 | 不明 | 精良 | 並 | 灰色 | 外面にうすく灰がかぶる。 | 23 |
| 須恵器平瓶 | 24 | — | — | 体部径16.4 | ・提瓶と同様な体部に口縁と環状把手がつく。 | ・体部中央をカキ目、下半をロクロヘラケズリ調整する。 | 右 | 良 | 〃 | 暗灰色 | 口縁部を欠く。 | 18 |
| 土師器甕 | 25 | 13.8 | (13.7) | 14.2 | ・口縁端部は丸い。<br>・肩の張りは弱い。 | ・体部上半を削いハケ目、下半をヘラケズリする。 | — | 〃 | 〃 | 淡褐色 | 底部を欠く | 17 |
| **2号墳羨道部出土土器** | | | | | | | | | | | | |
| 須恵器蓋杯（身） | 26 | 12.0 | 4.1 | 14.3 | ・口縁のたちあがりは短く、内傾強い。底部は丸い。 | ・底部はヘラ切り後なで。<br>・内面見込みは不定方向なで。 | 不明 | 石英白色小石多い | 並 | 黄灰色 | 底部に二本線のヘラ記号有り | 24 |
| | 27 | (13.0) | 4.1 | 15.3 | ・口縁のたちあがりは長く、内傾度弱い。 | ・底部は、ロクロによるヘラケズリ。 | 左 | 良 | 〃 | 灰色 | 一部残存。 | 38 |
| 須恵器蓋杯（蓋） | 28 | 13.0 | 3.3 | 13.0 | ・天井部は低く平坦。 | ・天井部はロクロヘラケズリ。<br>・口縁部内側に段。 | 右 | 白色小石少量 | 〃 | 青灰色 | | 35 |
| | 29 | 12.0 | 4.1 | 12.0 | ・天井部は高く平坦。 | ・天井部はロクロヘラケズリ。<br>・内面中央部は不定方向なで。 | 右 | 石英少量 | 硬 | 青灰色 | | 25 |
| 須恵器杯蓋 | 30 | 返り径9.4 | 3.8 | 11.2 | ・低い天井部に宝珠つまみと蓋内面に返りがつく。 | ・天井部ヘラ切り未調整。<br>・内面中央部一方向なで。 | 右 | 白色小石少量 | 〃 | 暗灰色 | 身31とセット | 1 |

第1表　向山2号墳出土土器観察表

| 器種・器形 | 土器No | 法量(cm) 口径 | 器高 | 最大径 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | ロクロ回転 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 | 登録No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器杯身 | 31 | 10.4 | 4.0 | 10.4 | ・口縁部はまっすぐ延びる。<br>・底部はやや丸味がある。 | ・底部はヘラ切り不調整。<br>・内面見込部一方向なで。 | 右 | 〃 | 〃 | 暗青灰色 | | 2 |
| 須恵器壺 | 32 | 13.8 | (17.9) | | ・肩の張る丸い体部<br>・口縁端部は上下に弱く肥厚。 | ・体部下半に平行叩き目文。<br>・内面に同心円叩き目文残る。 | 不明 | 〃 | 〃 | 暗灰色 | 口縁から肩部に灰がかぶる。 | 22 |
| 須恵器短頸壺 | 33 | — | — | 10.7 | ・口縁部を欠く。<br>・肩の張る扁平な体部 | ・底部ヘラ切り不調整ヘラ先のあたりが沈線状。 | 不明 | 良 | 〃 | 青灰色 | 底部に焼きぶくれあり。 | 26 |
| 須恵器甕 | 34 | 22.4 | — | — | ・頸部は外反し、口縁部は弱く屈折。屈折部に沈線。 | | 不明 | 白色小石多い | 並 | 黄灰色 | 内外面に灰がかぶる。 | 28 |

2号墳墳丘・周溝出土土器

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器蓋杯(蓋) | 35 | 12.2 | 3.5 | 12.2 | ・天井部は平坦で、口縁部はやや内弯する | ・底部はヘラ切り後なで。<br>・内面中央部一方向なで。 | 不明 | 白色小石多い | 並 | 暗灰色 | | 32 |
| 須恵器有蓋高杯 | 36 | 13.0 | — | — | ・蓋杯の身に基部が太く八の字形に大きく開く脚部がつく。 | ・杯底部は回転を利用したヘラケズリ<br>・脚端部の下面は平坦 | 右 | 良 | 〃 | 灰色 | | 30 |
| | 37 | — | — | 脚径10.8 | | | 不明 | 〃 | 〃 | 灰色 | | 29 |
| | 38 | 12.8 | — | — | | | 不明 | 〃 | 〃 | 灰色 | | 31 |
| 須恵器器台 | 39 | 32.0 | — | — | ・口縁部はまっすぐ外方へ開く。 | ・体部は縦方向の櫛目を施した後、沈線を施す。 | 不明 | 砂粒多い | 軟 | 黄灰色 | | 33 |

6号墳玄室内出土土器

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器蓋杯(身) | 1 | 13.3 | 5.5 | 16.2 | ・大中小の三種がある<br>・大形の身は、内傾するたちあがりが比較的薄手で長い。底部は丸くて深い。<br>・小形の身は、たちあがりが短く、内傾度が強い。底部は比較的平坦で浅い。 | ・底部の½以下をロクロ回転を利用したヘラケズリ調整。<br>・底部内面見込部を、二方向になでるもの(8.15)や同心円状のあて具痕を留めるもの(7.12)もある | 右 | 良 | 軟 | 淡灰色 | 蓋19とセット | 24 |
| | 2 | 12.6 | 5.2 | 15.7 | | | 右 | 〃 | 〃 | 灰白色 | | 29 |
| | 3 | 13.4 | 5.3 | 16.2 | | | 右 | 〃 | 〃 | 灰白色 | 底部外面に一本線(8.5cm)のヘラ記号 | 30 |
| | 4 | 13.4 | (4.4) | 16.1 | | | 右 | 石英白色小石多い | 並 | 青灰色 | ½残存 | 43 |
| | 5 | 12.4 | 4.1 | 14.5 | | | 右 | 〃 | 〃 | 灰色 | | 1 |
| | 6 | 12.4 | 4.2 | 14.7 | | | 右 | 石英多い | 軟 | 灰褐色 | | 2 |
| | 7 | 13.0 | 3.3 | 15.5 | | | 左 | 灰色小石多い | 並 | 灰色 | 底部に大小の焼きぶくれあり。 | 23 |
| | 8 | 12.0 | 4.4 | 14.3 | | | 右 | 石英長石粒少量 | 〃 | 青灰色 | 底部外面に×印のヘラ記号。 | 22 |
| | 9 | 12.0 | 4.0 | 14.4 | | | 右 | 石英多い | 〃 | 青灰色 | | 35 |
| | 10 | 12.8 | 4.0 | 14.8 | | | 左 | 良 | 〃 | 灰色 | 底部うすく灰かぶり。 | 12 |
| | 11 | 12.4 | 3.9 | 14.6 | | | 右 | 石英長石粒多い | 〃 | 灰白色 | 蓋21とセット。 | 21 |
| | 12 | 12.6 | 4.0 | 14.8 | | | 右 | 石英白色小石多い | 硬 | 青灰色 | | 47 |
| | 13 | 12.5 | 4.2 | 14.7 | | | 左 | 良 | 並 | 灰白色 | 自然釉かかる。 | 17 |
| | 14 | 12.1 | 3.6 | 14.1 | | | 右 | 石英長石粒少量 | 〃 | 淡灰色 | | 36 |
| | 15 | 11.7 | 3.5 | 13.3 | | | 左 | 良 | 〃 | 灰色 | | 16 |
| 須恵器蓋杯(蓋) | 16 | 14.4 | 5.1 | 14.4 | ・天井部が高くて丸い<br>・口縁部と天井部との境が不明瞭。<br>身と同様大中小の三種がある。 | ・ロクロ水挽き痕がよく残る。<br>・天井部は½以下をロクロ回転によるヘラケズリ調整。<br>・口縁端部は丸く終わるものが多いが、内側に弱い段を有するもの(17～19、21、27)もある。 | 右 | 〃 | 軟 | 灰白色 | | 39 |
| | 17 | 14.5 | 5.1 | 14.5 | | | 右 | 〃 | 〃 | 灰白色 | | 34 |
| | 18 | 14.5 | 4.8 | 14.5 | | | 右 | 〃 | 〃 | 黄灰色 | 天井部中央に一本線(9cm)のヘラ記号 | 48 |
| | 19 | 14.9 | 5.3 | 14.9 | | | 右 | 石英長石雲母多い | 〃 | 灰白色 | | 25 |
| | 20 | 14.4 | 4.4 | 14.4 | | | 右 | 良 | 〃 | 黄灰色 | | 13 |
| | 21 | 14.0 | 4.1 | 14.0 | | | 右 | 石英長石粒少量 | 〃 | 灰白色 | | 3 |

第2表　向山2・6号墳出土土器観察表

| 器種・器形 | 土器No | 法量(cm) 口径 | 器高 | 最大径 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | ロクロ回転 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 | 登録No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器蓋杯（蓋） | 22 | 14.0 | 4.0 | 14.0 | ・口径に比べ天井が高い | ・天井部ヘラ切り不調整<br>・内面中央部一方向なで | 左 | 石英白色小石少量 | 並 | 灰色 | | 14 |
| | 23 | 13.8 | 4.4 | 13.8 | | | 右 | 〃 | 硬 | 青灰色 | | 27 |
| | 24 | 13.8 | 4.6 | 13.8 | | | 右 | 〃 | 並 | 青灰色 | | 49 |
| | 25 | 12.8 | 3.9 | 12.8 | | | 右 | 良 | 〃 | 灰色 | | 9 |
| | 26 | 11.9 | 3.8 | 11.9 | | | 不明 | 〃 | 〃 | 灰色 | 焼きひずみあり | 42 |
| | 27 | 10.7 | 4.3 | 10.7 | | | 右 | 白色小石多い | 〃 | 灰色 | | 4 |
| | 28 | 14.4 | 3.9 | 14.4 | ・天井部が平坦で低い<br>・大中小の三種がある | ・天井部は回転を利用したヘラケズリ調整板圧痕を留めるもの(28)やハケ目調整するもの(32)もある<br>・口縁端部内側に、内傾する面をもつもの(29)や細い沈線で段をつくるもの(28)もある。 | 左 | 石英白色小石多い | 〃 | 淡青灰色 | | 50 |
| | 29 | 14.1 | 4.0 | 14.1 | | | 左 | 白色小石少量 | 硬 | 青灰色 | 内面中央に同心円状あて具痕有り | 33 |
| | 30 | 13.8 | 3.7 | 13.8 | | | 右 | 石英白色小石少量 | 並 | 淡灰色 | 天井部と口縁部との境に沈線状の段 | 28 |
| | 31 | 14.3 | 3.6 | 14.3 | | | 左 | 石英粒少量 | 硬 | 青灰色 | 内面中央に同心円状あて具痕有り | 40 |
| | 32 | 12.6 | 3.0 | 12.6 | | | 不明 | 砂粒多い | 並 | 灰色 | 半面に自然釉かかる | 41 |
| 須恵器壺蓋 | 33 | 9.8 | 3.5 | 9.8 | ・天井部平坦 | ・天井部はロクロヘラケズリ。内面中央部一方向なで | 右 | 良 | 〃 | 暗青灰色 | | 15 |
| 須恵器有蓋高杯 | 34 | 13.2~12.6 | 7.2 | 脚径9.9 | ・蓋杯の身に基部の太い八の字形に大きく開く脚部がつく<br>・34、35は脚注部の三方に径4mm前後の円形透かしあり | ・杯身底部はロクロヘラケズリ<br>・脚裾端部は上下に肥厚し面をつくる | 不明 | 石英粒少量 | 〃 | 灰色 | 口縁歪みあり | 18 |
| | 35 | 13.4 | 8.9 | 脚径11.0 | | | 不明 | 白色小石多い | 〃 | 灰色 | | 10 |
| | 36 | 13.4 | 7.0 | 脚径10.0 | | | 左 | 〃 | 〃 | 灰色 | | 11 |
| 須恵器無蓋高杯 | 37 | 11.4 | 16.5 | 脚径10.5 | ・小さな杯部に長脚二段三方透かしの脚部がつく | ・体部を櫛描刺突文で飾る。<br>・脚部上半は中身である。 | 不明 | 良 | 硬 | 黒灰色 | 外面に暗緑色の自然釉多量につく | 44 |
| | 38 | 12.2 | 14.1 | 脚径11.1 | ・深い杯部にらっぱ状に開く長い脚部がつく | ・脚注部内面にしぼり目残る<br>・脚端部は下方に折れる | 不明 | 精良 | 〃 | 黒灰色 | 器面光沢あり | 45 |
| | 39 | — | — | 脚径11.6 | ・長脚二段透かしの脚下半部と思われる | ・脚端部は下方に肥厚し断面三角形となる | 不明 | 良 | 並 | 灰色 | 外面うすく灰かぶり | 46 |
| 須恵器短頸壺 | 40 | 7.6 | 10.2 | 11.7 | ・口縁部はやや内弯気味にたちあがり若干長い | ・底部はロクロヘラケズリ | 左 | 石英粒多い | 〃 | 青灰色 | | 20 |
| 須恵器台付長頸壺 | 41 | — | — | 16.5 | ・肩が張り体部中央が外へ大きく張り出す | ・体部中央の沈線区画内に櫛描刺突文を施す | 不明 | 石英白色小石多い | 硬 | 暗灰色 | 口縁と脚部を欠く | 32 |
| | 42 | — | — | 脚径11.5 | ・脚部のみ。脚柱部から脚裾部にかけ屈折する | | 不明 | 良 | 並 | 灰色 | | 19 |
| 須恵器壺 | 43 | 12.6 | 14.3 | 12.6 | ・肩の張る偏平な体部に長い頸部、屈折して外方へ大きく開く口縁部がつく<br>・大小の二種がある | ・器面を沈線や櫛描波状刺突文で飾るもの(45)、沈線とカキ目で飾るもの(44)、沈線のみで無文のもの(46)、がある<br>・43、46は底部ロクロヘラケズリ | 左 | 石英長石粒少量 | 硬 | 黒灰色 | | 6 |
| | 44 | — | — | — | | | 不明 | 石英白色小石少量 | 並 | 暗灰色 | 口縁部を欠く | 8 |
| | 45 | 10.2 | 11.9 | 10.2 | | | 不明 | 良 | 硬 | 黒灰色 | 内面灰かぶり | 38 |
| | 46 | 9.2 | 11.1 | 9.2 | | | 右 | 石英長石粒多い | 並 | 灰色 | | 7 |
| 土師器台付小型壺 | 47 | 7.2 | 11.7 | 脚径7.1 | ・小型壺に細長く、脚裾部が外側へ開く脚部がつく | ・壺体部下半をロクロヘラケズリするようであるがていねいなロクロなでによりケズリ痕跡が消える | 不明 | 良 | 〃 | 明褐色 | ロクロ製 | 58 |
| | 48 | 7.4 | 11.7 | 脚径7.5 | | | 不明 | 〃 | 〃 | 明褐色 | ロクロ製 | 59 |
| 土師器壺 | 49 | 10.4 | 15.5 | 14.6 | ・球形の体部にくの字に曲がる口縁部がつく | ・輪積成形後器面をロクロなでし体部下半をロクロケズリ | 右 | 石英長石金雲母 | 軟 | 淡褐色 | ロクロ製 | 56 |
| 須恵器提瓶 | 50 | 7.7 | 20.9 | 17.2 | ・体部は全面がふくれ背面はほぼ平坦<br>・口縁部は外反もしくは、直線的に開き、口縁端部は、上下に肥厚するもの(50、53、54)、下方に肥厚するもの(51)、上方に肥厚するもの(56)丸く終わるもの(52、55)など様々である | ・前面をカキ目、背面をロクロヘラケズリするもの(50、51、54)のほか両面ともカキ目を施すもの(53)、前面をカメ目、背面中央部を一方向になでるもの(52)、両面とも板状工具によるカキ目風なでを行うもの(55、56)がある | 右 | 良 | 並 | 黒灰色 | | 5 |
| | 51 | 7.2 | 19.2 | 16.2 | | | 右 | 白色小石少量 | 〃 | 黒灰色 | 口縁部の接合ゆがむ | 52 |
| | 52 | 6.2 | 17.8 | 13.7 | | | 不明 | 小石多い | 〃 | 青灰色 | 底部に5.9cm×6.2cmの焼台痕あり | 53 |
| | 53 | 8.5 | 19.4 | 15.9 | | | 不明 | 良 | 〃 | 灰色 | | 31 |

第3表　向山6号墳出土土器観察表

| 器種・器形 | 土器No | 法量(cm) 口径 | 器高 | 最大径 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | ロクロ回転 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 | 登録No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 須恵器堤瓶 | 54 | 10.0 | 25.3 | 21.7 | ・肩部には、環状把手のつく（53）以外はカギ状に折れる耳がつく。 | | 左 | 石英粒少量 | 〃 | 黒灰色 | 口縁内外面と肩部に灰かぶり | 51 |
| | 55 | — | — | 20.7 | | | 右 | 〃 | 〃 | 暗灰色 | 肩部に濃緑色の釉かかる。 | 54 |
| | 56 | 6.8 | 19.2 | 14.4 | | | 不明 | 良 | 〃 | 灰色 | 全面に灰かぶり | 26 |
| 須恵器器台 | 57 | — | — | 脚径 25.0 | ・透孔は下段のみ台形で、他は長方形の3方透かし。 | ・櫛描刺突文やハケ状施文で脚部を飾る | 不明 | 〃 | 〃 | 灰色 | 脚裾部歪みあり | 55 |
| 土師器長頸壺 | 58 | 10.8 | 20.8 | 13.6 | ・丸い体部にやや外反気味に長く延びる頸部がつく。 | ・頸部内外面、体部下半をハケ目調整 | — | 〃 | 〃 | 淡黄褐色 | 体部に5.8cm×4.2cmの黒斑あり | 60 |
| 土師器高杯 | 59 | 13.6 | 8.4 | 脚径 9.5 | ・椀形の杯部に短い脚部がつく。 | ・脚のつけ根をハケ目調整し、脚柱部を面取風なで。 | — | 砂粒多い | 〃 | 淡褐色 | | 57 |
| 土師器甕 | 60 | 15.6 | 12.4 | 15.3 | ・肩の張りが弱く、口縁部はやや外反 | ・体部上半をハケ目、下半と内面ををヘラケズリ | — | 石英、長石雲母粒 | 〃 | 淡褐色 | | 37 |
| | 61 | 13.2 | 16.0 | 15.8 | ・球形の体部にくの字に曲がる口縁部がつく | ・体部外面粗いハケ目 内面なで調整 | — | 金雲母粒少量 | 〃 | 明褐色 | 粘土紐巻き上げ 痕跡よく残る | 61 |

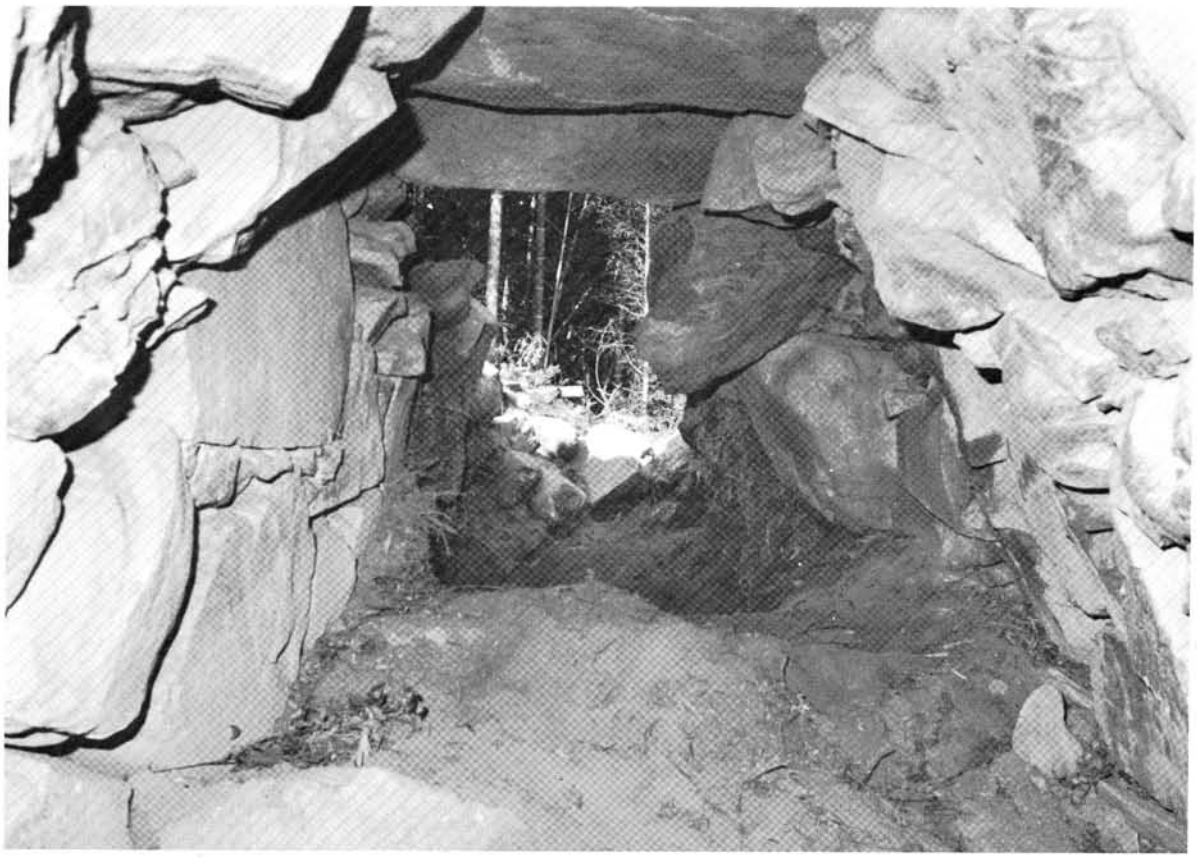
| 器種・器形 | 土器No | 法量(cm) 口径 | 器高 | 直径 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 | 登録No |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 土師器・皿 | 49 | 9.2 | 1.9 | — | | 外面 指押さえ、内面 不定方向ナデ | 良 | 良 | 淡褐色 | 西平坦面包含層 | 43 |
| 土師器・皿 | 50 | 6.8 | 1.4 | — | へそ皿 | 内外面ともナデ | 〃 | 〃 | 茶褐色 | 2号墳墳丘表土 | 42 |
| 瓦器・椀 | 51 | 15.2 | 4.4 | 5.0 | 内弯気味に大きく外へ開く体部。低い三角形の高台 | 外面 指押さえ、内面 ヘラミガキ 見込みは うずまき状のヘラシガキ | 精良 | 〃 | 黒色 | 2号墳溪道上層 | 27 |
| 瓦器・椀 | 52 | 15.2 | 5.2 | 5.0 | 〃 | 外面 指押さえ、内面 ヘラミガキ 見込みは ラセン状のヘラシガキ | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 32 |
| 瓦器・椀 | 53 | 12.0 | 3.4 | 4.6 | 高台つかない | 外面 指押さえ、ナデ 内面 ヘラミガキは粗い | 良 | 〃 | 〃 | 2号墳Ⅰ区周溝上層 | 41 |
| 瓦器・鍋 | 54 | 25.5 | — | — | 口縁端部折り返し、内傾する平坦な面あり、体部肩張らない | 体部内面は細かい横方向のハケ目 | 良 | 〃 | 〃 | 2号墳溪道上層 外面スス付着 | 56 |
| 信楽焼・甕 | 55 | — | — | — | 口縁端部折り返し、断面N字状 | ロクロ水挽き | 良 長石ふき出す | 〃 | 淡褐色 | 2号墳Ⅲ区表土 | 57 |
| 信楽焼・甕 | 56 | — | — | — | 〃 | 〃 | 良 | 〃 | 暗黄褐色 | 2号墳墳丘表土 | 59 |
| 信楽焼・擂鉢 | 57 | 32 前後 | — | — | 口縁端部小さく外反おろし目なし。 | 〃 | 〃 | 〃 | 明褐色 | 〃 | 58 |
| 須恵器・鉢 | 58 | — | — | 12.0 | | 底部未調整、体部下ロクロヘラケズリ、上ロクロナデ | 〃 | 〃 | 灰色 | 2号墳周溝上層 | 40 |
| 灰釉・椀 | 59 | 14.8 前後 | 7.4 | 4.9 | 付高台の深目の椀 | 外面 ロクロケズリ 端部より内面 ロクロナデ | 〃 | 〃 | 淡黄緑色 淡褐色 | 2号墳東側表土 | 52 |
| 灰釉・花瓶 | 60 | — | — | 8.2 | | 脚とりつけ ヨコナデ ロクロ水挽き | 〃 | 〃 | 緑釉 | 2号墳東側平坦面包含層 | 60 |
| 青磁・椀 | 61 | 16.5 | — | — | | | 〃 | 〃 | 淡緑色 | 2号墳西側平坦面表土層 | 53 |
| 青磁・椀 | 62 | — | — | 6.0 | | | 〃 | 〃 | 緑色 | 〃 | 54 |
| 火舎 | 63 | — | — | — | 円形の火舎 | 内面 ナデ 外面 ハリツケとスタンプ | 〃 | 〃 | 内暗茶 外暗灰茶 | 2号墳墳丘北裾 | 62 |
| 瓦質土器火舎 | 64 | — | — | — | 円形の火舎 | 内面 ヨタナデ 外面 ハリツケとスタンプ | 〃 | 〃 | 灰 | 2号墳溪道埋土 | 63 |
| 火舎 | 65 | — | — | — | 方形の火舎 | 内面 ヨタナデ 外面 ハリツケとヨコナデ | 〃 | 〃 | 内淡茶 外黄茶 | 2号墳墳丘北裾 | 61 |
| | | | | | | | | | | | |
| 瀬戸天目茶碗 | 6号墳 62 | 12.2 | 6.5 | 4.0 | 内返り高台 | 外面下ヘラケズリ 内外面ヘラケズリ ロクロナデ | 〃 | 〃 | 黒色 | 6号墳石室埋土上層 | 6号墳 51 |
| 瀬戸灰釉手付水注 | 6号墳 63 | — | — | 10.0 | | 外面 ロクロナデ 内面 指押さえの後ヨコナデ | 〃 | 〃 | 淡緑色 | 6号墳石室埋土 | 6号墳 55 |

第4表　向山6号墳出土土器、中世の土器観察表

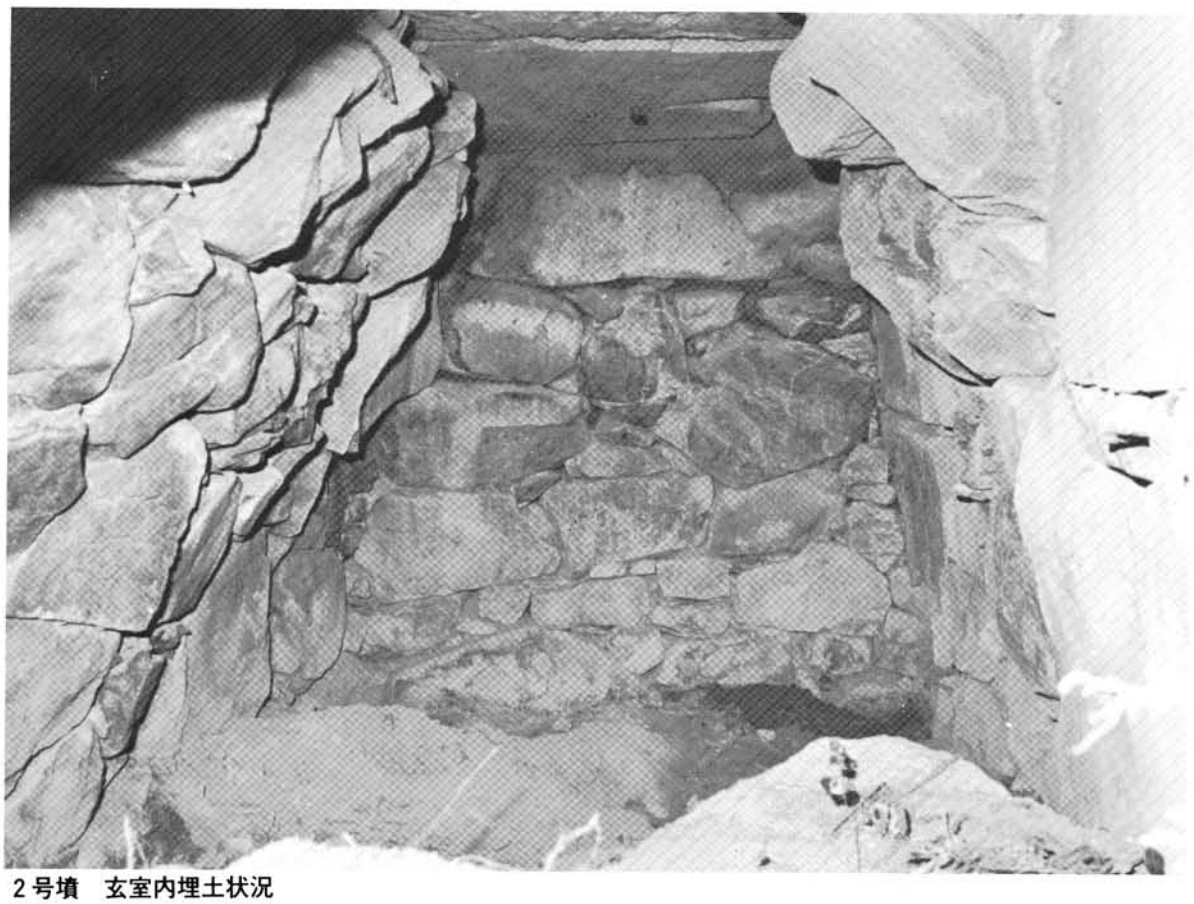
# 図　　版

２号墳　調査前墳丘（東から）

２号墳　調査前墳丘（北から）



２号墳　玄室内埋土状況（玄室内より外）



２号墳　玄室内埋土状況

2号墳　玄室・羨道埋土除去後（北から）

2号墳　墳丘盛土除去後（北から）

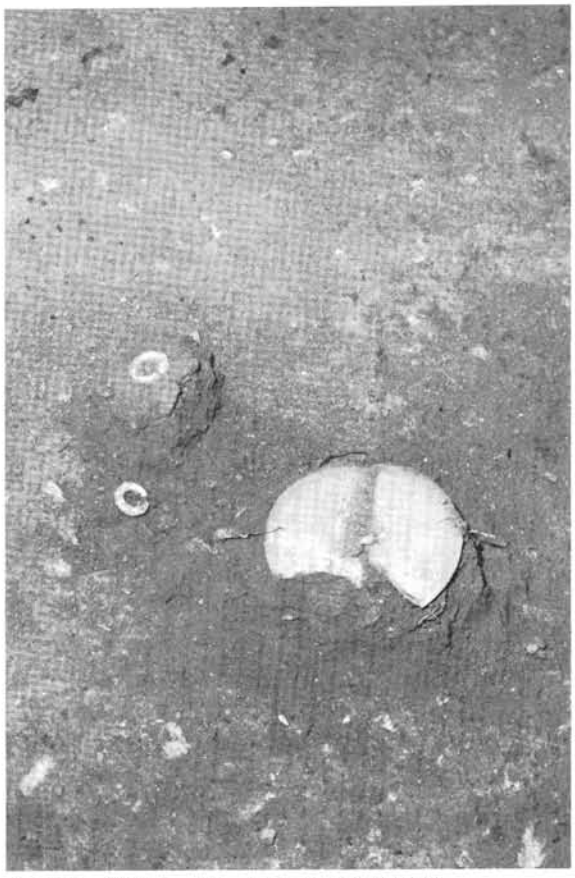
２号墳　墳丘たちわり調査（南西から）

２号墳　墳丘たちわり調査（東から）

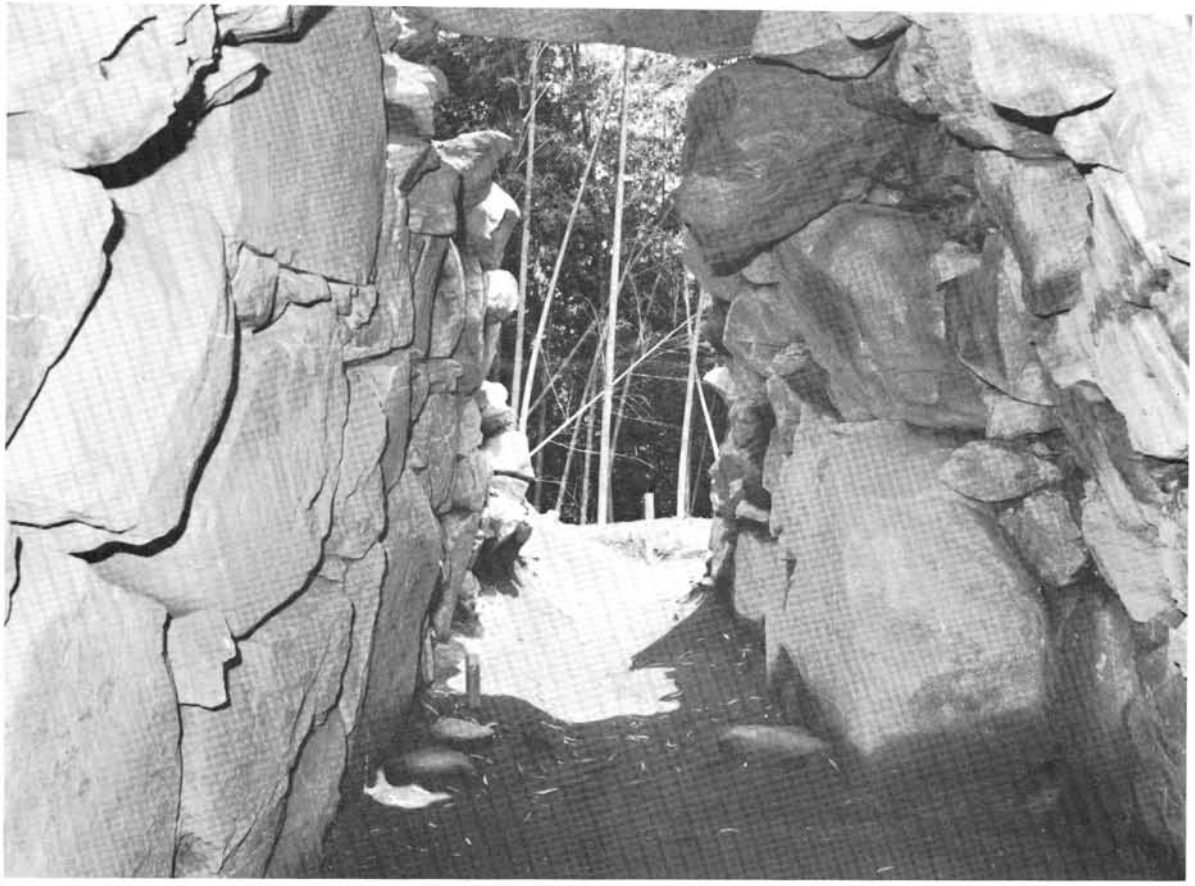
２号墳　銀環45・46出土状況

２号墳　鉄鏃47出土状況

２号墳　須恵器30・31出土状況



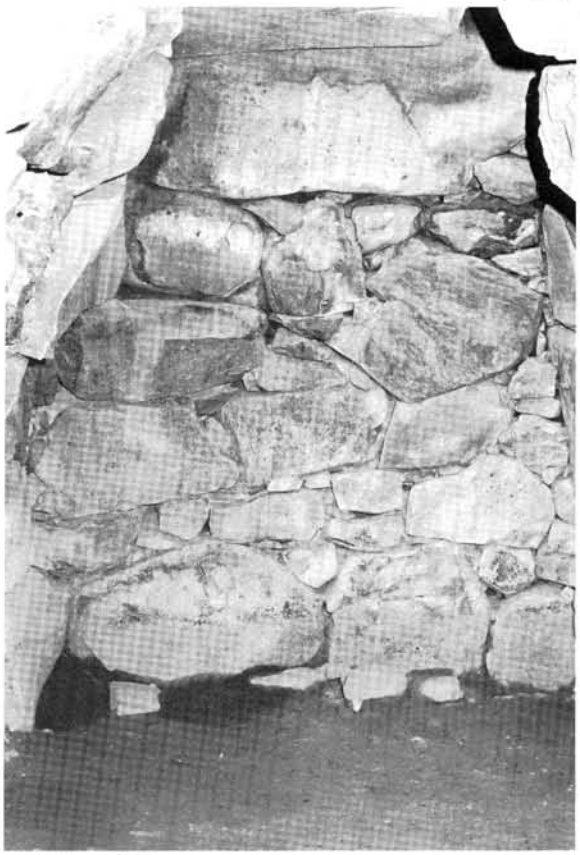
２号墳　銀環40・44・須恵器３出土状況



２号墳　玄室内より羨道

２号墳　玄室

2号墳　袖部



2号墳　奥壁

2号墳　奥壁と東側壁

2号墳　奥壁と西側壁

２号墳　奥壁上部東隅

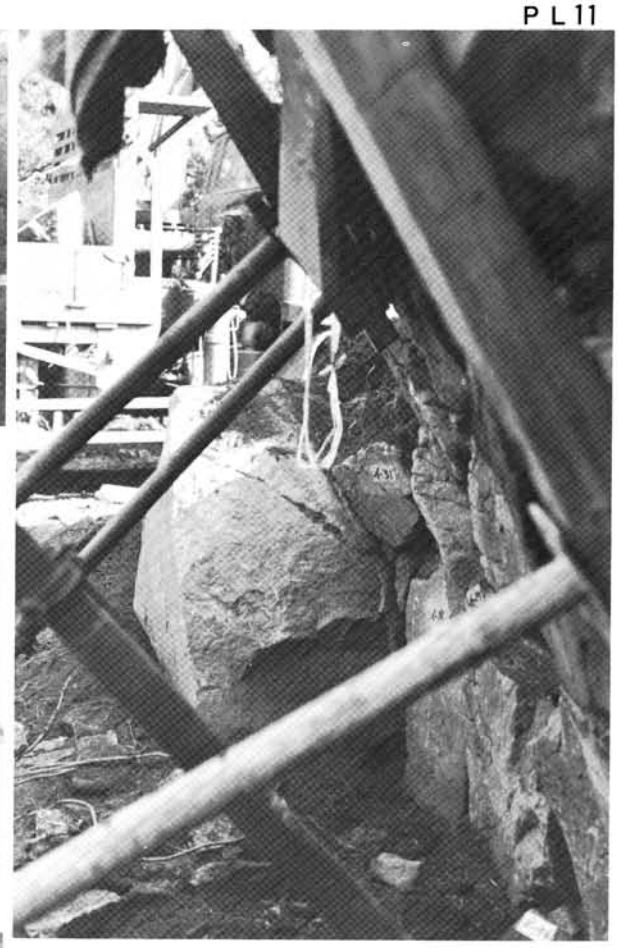
２号墳　奥壁上部西隅

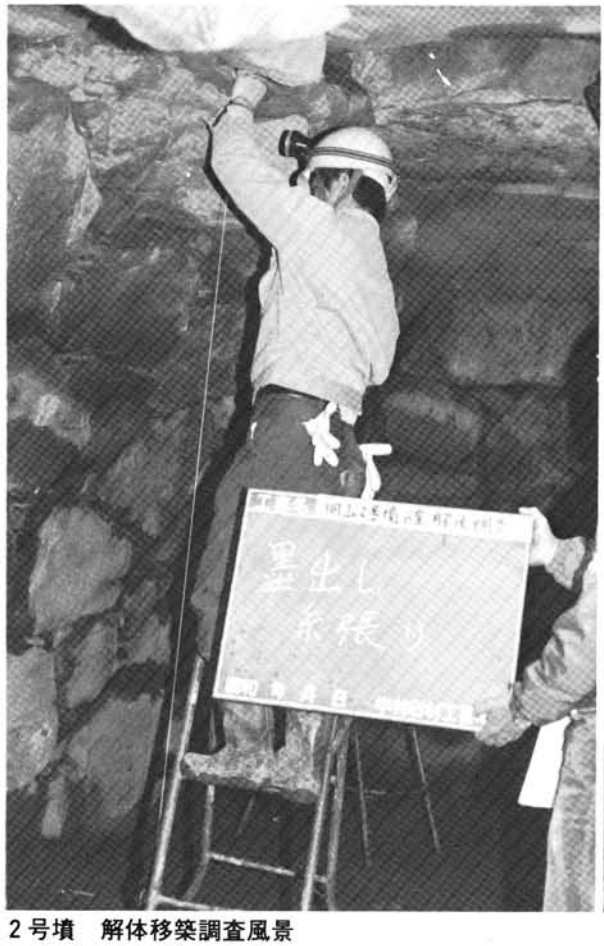
6号墳　調査後（東より）

6号墳　遺物出土状況

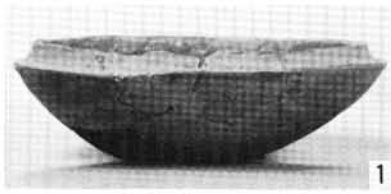
6号墳　調査風景

調査区全景（東から）

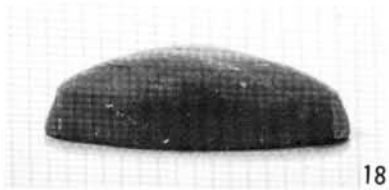




2号墳　解体移築調査風景


1

11


18

2

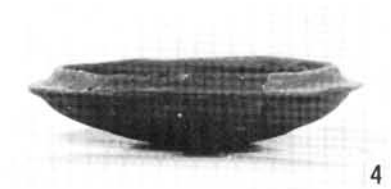
12

29

3

14

35


4

15

30

5

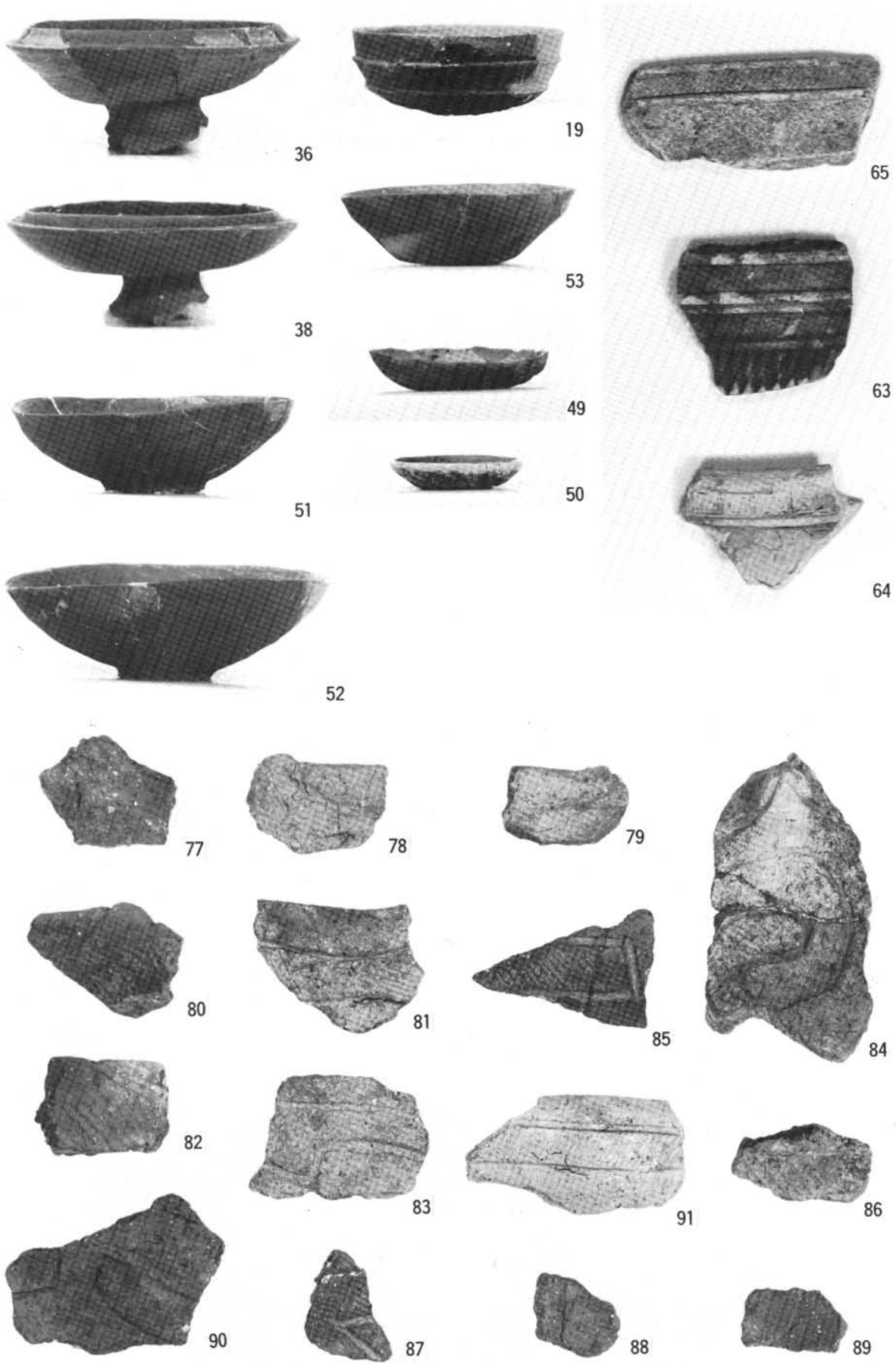
16

31

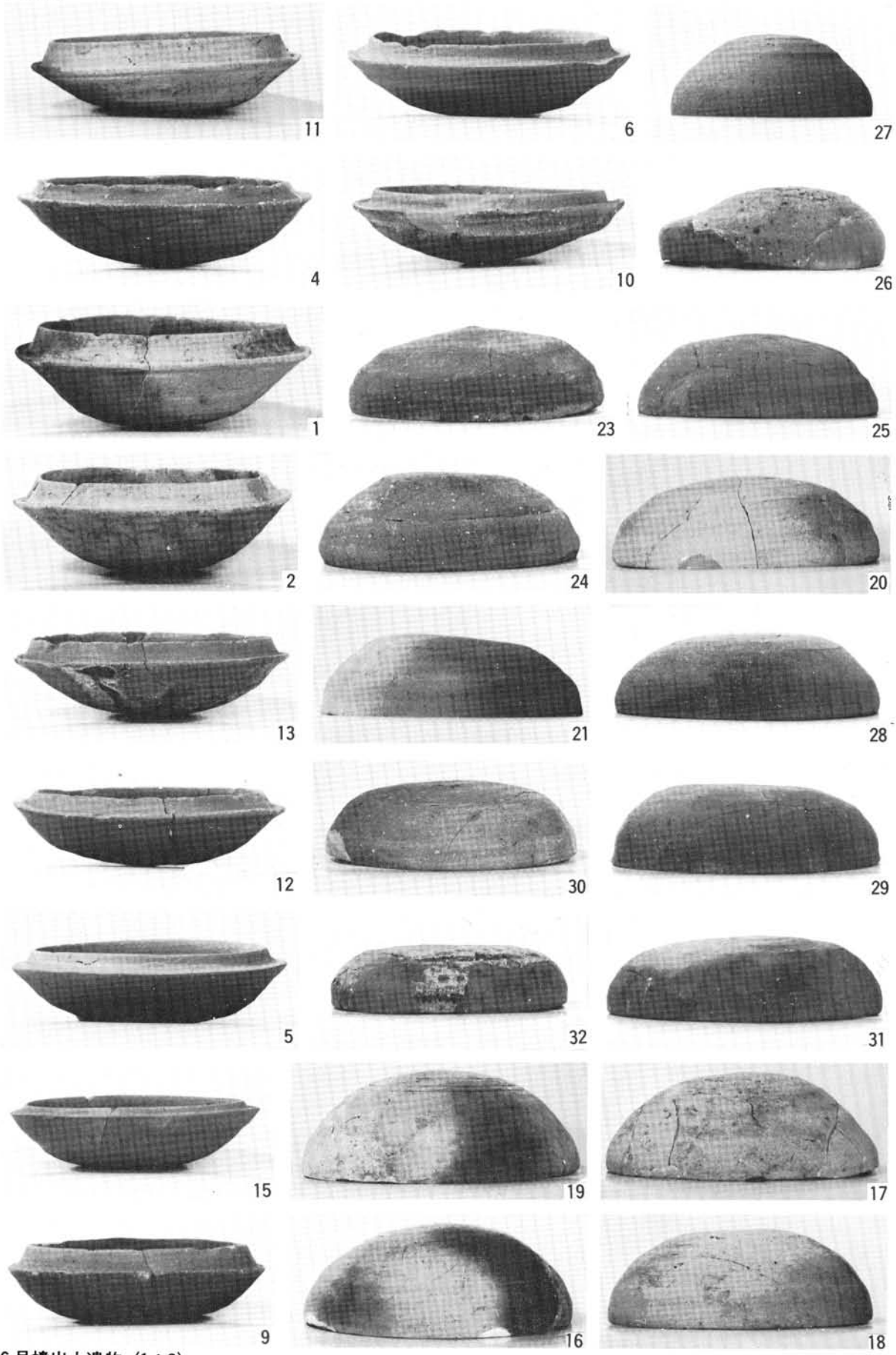
22

32

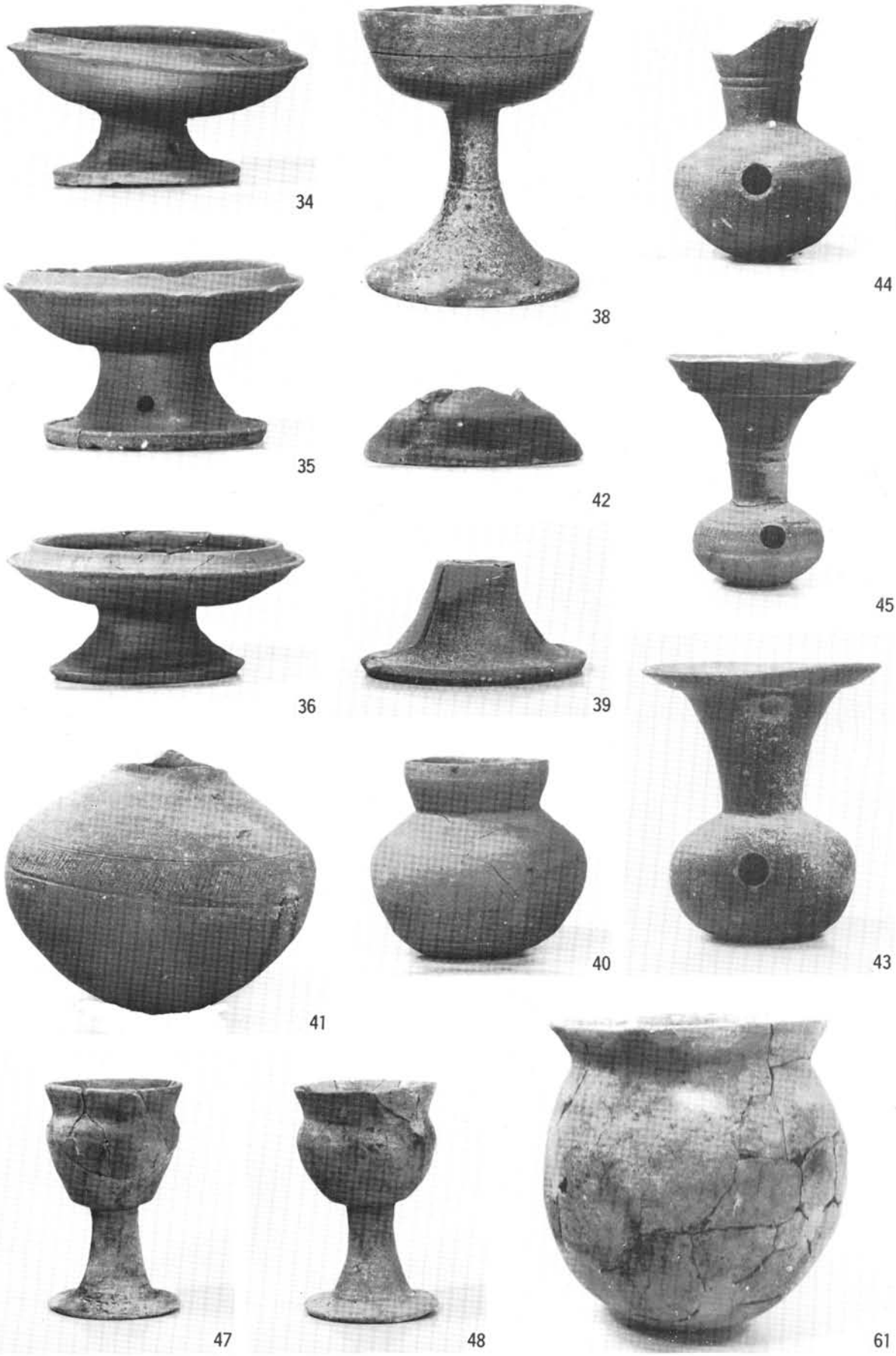
2号墳出土遺物（1：3）




墳丘盛土・墳裾出土遺物（1：3）



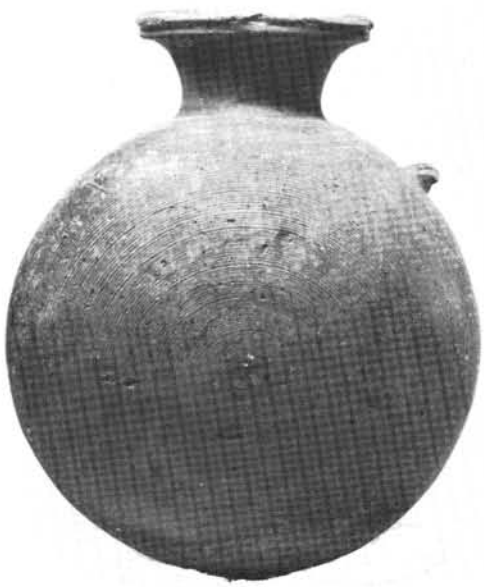

6号墳出土遺物（1：3）



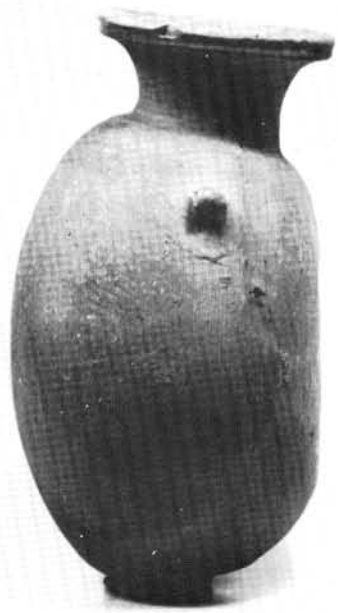

6号墳出土遺物（1：3）

57

58



50



50

6号墳出土遺物（1：3）

52

52

51

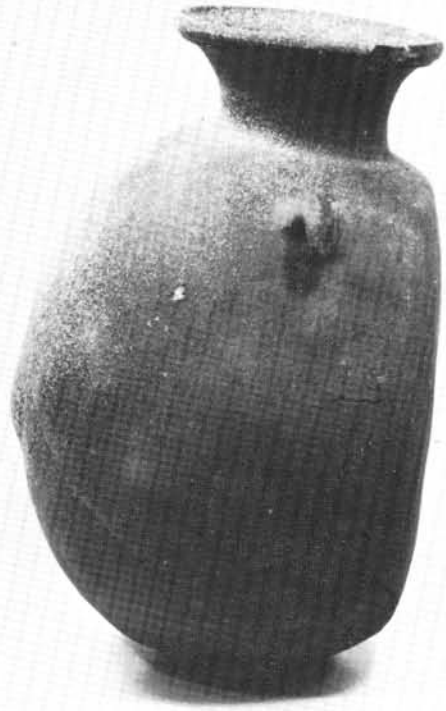
51

53

53

6号墳出土遺物（1：3）

54

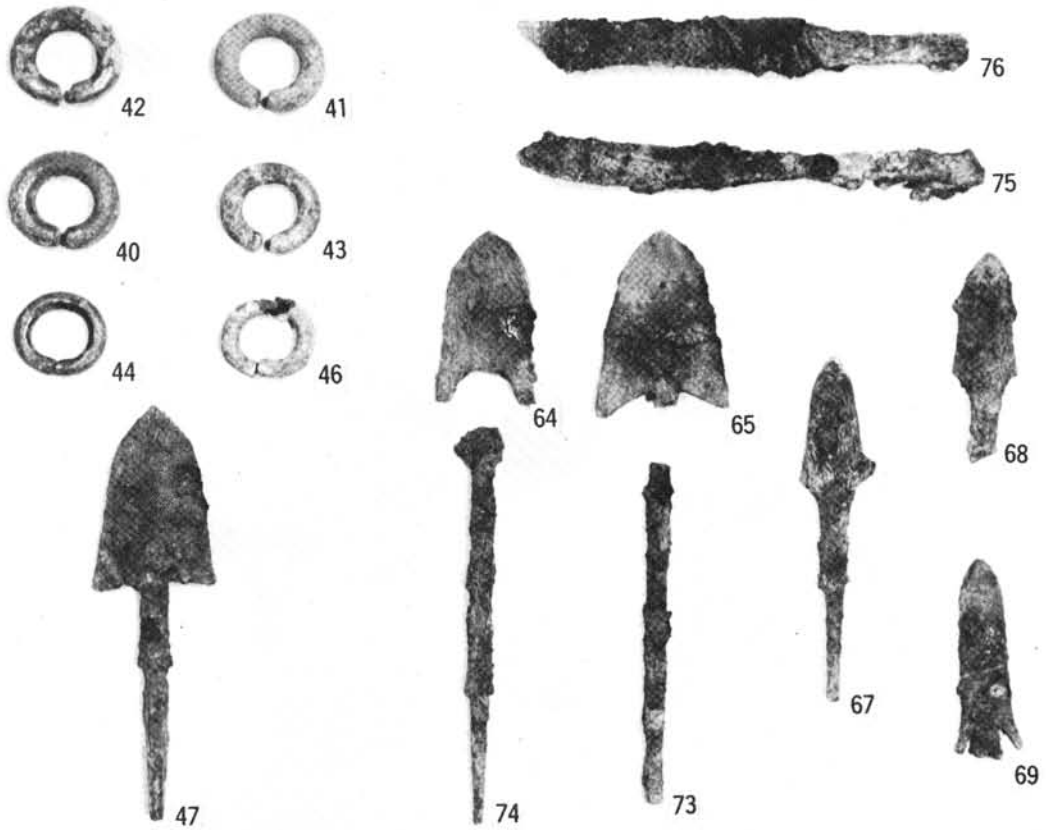


54

55

55

6 号墳出土遺物（1：3）




2号墳出土遺物（1：3）銀環（40～44･46）、鉄鏃（47）
6号墳出土遺物（1：3）鉄鏃（64･65･67～69･73･74）、鉈（75）、刀子（76）

昭和62(1987)年3月に刊行されたものをもとに
平成17(2005)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告書　76

向山２・６号墳発掘調査報告

1987年３月31日

編集
発行　三重県教育委員会

印刷　オリエンタル印刷株式会社